鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報
27

平成23(2011)年度事業報告

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

平成25(2013)年3月

序

鹿児島大学埋蔵文化財調査室は，昭和60（1985）年6月1日に設置されましたが，昨年度まで27年間使用してきた施設名称は幕を閉じ，平成24（2012）年度4月1日，新たな施設名称「埋蔵文化財調査センター」として再出発しました。事業は従来通り，発掘調査・試掘調査・立会調査・普及啓発活動などを随時行なっています。

本年次報告『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』27は，平成23（2011）年度事業報告であり，発掘調査2件，試掘調査2件，立会調査10件，公開講座ほかその他の事業の概要が掲載されています。

鹿児島大学キャンパスには，後期旧石器時代から近代までの，貴重な遺跡が包蔵されていることが，鹿児島大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって，次第に明らかにされています。今年度もまた郡元キャンパスの調査区で，古墳時代の住居跡と水田跡が検出されました。古墳時代の集落とそれに付随する生産遺跡の同時検出は，南九州地域では非常に貴重な例となります。過去の調査成果については，これまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Vol.1～26，『鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』第1～7集として逐次報告されてきました。

現在もキャンパス内では，多くの建物の建築や周辺整備などが行われ，それに先立って必要な埋蔵文化財調査が行われています。学内施設整備が円滑に進むよう，埋蔵文化財調査センターは全力を尽くしております。そのほかにも、大学キャンパス内から出土する貴重な大学の財産，県民・国民の財産としての埋蔵文化財の調査および研究を行うための体制の実現について，重ねて全学的なご理解，ご支援をお願い申し上げます。

平成25（2013）年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長
鹿児島大学埋蔵文化財調査委員長

新田　栄治

例言

1．本報告は，鹿児島大学埋蔵文化財調査室（当時）が平成 23（2011）年度に行なった事業の年次報告である。したがって，内容についての施設名称や職制などは当時のものである。

2．本書に掲載している発掘・試掘調査は，鹿児島大学埋蔵文化財調査室（当時）が担当した。立会調査は，鹿児島市教育委員会が担当し，鹿児島大学埋蔵文化財調査室がこれを補助した。

3．本書の作成にあたっては，埋蔵文化財調査センターが行なった。担当者は以下のとおりである。

実測（東　友子・濵田綾子・赤尾和洋）
製図（新里貴之・東・濵田・赤尾・寒川朋枝）
作表（新里）　執筆（新里）　写真（新里）

編集（新里・寒川・中村）

4．発掘調査による遺物の保管は，埋蔵文化財調査センターの管理のもと，各学部，部局が収蔵している（平成 16/2004 年　施設マネージメント委員会による）。また，図面・写真・デジタルデータなどの資料は，埋蔵文化財調査センターにおいて保管・管理されている。

凡例

1　昭和60（1985）年6月1日の埋蔵文化財調査室（当時）設置を機として，鹿児島大学キャンパス内におけるこれからの埋蔵文化財調査室に便であるように，鹿児島大学キャンパス内座標を鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）と脇田亀ヶ原遺跡（桜ケ丘団地；旧宇宿団地）とに設定した。その設定については以下のとおりである。

（1）郡元団地では，国土座標第2座標系（X=-158.200，Y=-42.400）を基点として，一辺50mの方形地区割りを行なった（Fig.1参照）。
（2）桜ケ丘団地では，国土座標第2座標系（X=-161.600，Y=-44.400）を基点として，一辺50mの方形地区割りを行なった（Fig.2参照）。

2　本年報におけるレベル高は，すべて海抜を表し，方位は真北方向を示す。

3　土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。この色調に当てはまらないものについては「～に類似」，あるいは一般的な色調で表記した。

4　遺物に関しては観察表を作成した。その表記中，復元によるサイズは（　）内に記す。

5　本文中の遺物番号は，図，写真，遺物観察表などと一致している。

6　図・写真・表は，通し番号を付す。

目次

序
例言
凡例

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
鹿児島大学埋蔵文化財調査センター規則・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅰ　平成23（2011）年度の事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅱ　発掘調査の概要
2011-1　郡元団地R～T-7～9区（附属中学校改修工事その他工事）発掘調査・・・8
2011-3　桜ケ丘団地D・E-7・8区（基幹整備工事）発掘調査・・・・・・・・・・・14

Ⅲ　試掘調査
2011-2　桜ケ丘団地D・E-7・8区（基幹整備工事）試掘調査・・・・・・・・・・・19
2011-4　郡元団地H・I-3・4区（学習支援センター建設）試掘調査・・・・・・・・23

Ⅳ　立会調査（2011-A～L）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

Ⅴ　整理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

Ⅵ　刊行・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

Ⅶ　保管・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

Ⅷ　その他の事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
1　公開講座
2　遺跡・遺物見学，整理作業体験
3　調査室のアウトリーチ活動報告
4　遺物資料貸出
5　新聞による鹿児島大学構内遺跡郡元団地・脇田亀ヶ原遺跡桜ケ丘団地

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則

規則第32号

(趣旨)

第1条　この規則は，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター規則(平成16年規則第103号)第8条の規定に基づき，鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会(以下「委員会」という。)に関し，必要な事項を定める。

(組織)

第2条　委員会は，次に掲げる委員をもって組織する。

(1)　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長(以下「センター長」という。)

(2)　各学部，大学院理工学研究科及び大学院医歯学総合研究科の教授，准教授又は講師のうちから選出された者各1名

2　前項第2号の委員の任期は，2年とし，再任を妨げない。ただし，委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

(審議事項)

第3条　委員会は，次に掲げる事項について審議する。

(1)　調査実施計画に関すること。

(2)　埋蔵文化財調査センターの予算に関すること。

(3)　その他埋蔵文化財の業務に関すること。

(委員長)

第4条　委員会に委員長を置き，第2条第1項第1号の委員をもって充てる。

2　委員長は，委員会を招集し，その議長となる。

3　委員長に事故があるときは，委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第5条　委員会は，委員の過半数の出席をもって成立し，議事は，出席委員の過半数をもって決し，可否同数の場合は，議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条　委員会が必要と認めるときは，委員以外の者を出席させ，意見を聴くことができる。

(事務)

第7条　委員会に関する事務は，施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条　この規則に定めるもののほか，委員会の運営に関し必要な事項は，委員会が別に定める。

附　則

この規則は，平成16年4月1日から施行する。

附　則

この規則は，平成18年4月1日から施行する。

附　則

1　この規則は，平成19年4月1日から施行する。

2　この規則の施行前に委員となった助教授は，その任期の満了の日まで引き続き委員とする。

附　則

この規則は，平成19年11月28日から施行し，平成19年4月1日から適用する。

附　則

この規則は，平成20年1月1日から施行する。

附　則

この規則は，平成21年4月1日から施行する。

附　則

この規則は，平成24年4月1日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター規則

規則第103号

(趣旨)

第1条　この規則は，鹿児島大学学則(平成16年規則第86号)第7条第2項の規定に基づき，鹿児島大学埋蔵文化財調査センター(以下「センター」という。)に関し，必要な事項を定める。

(目的)

第2条　センターは，鹿児島大学(以下「本学」という。)の埋蔵文化財の調査に関する業務を行い，本学内に存在する埋蔵文化財の保護対策を講ずることを目的とする。

(業務)

第3条　センターは，次の業務を行う。

(1)　調査実施計画の立案

(2)　発掘調査，分布調査及び確認調査

(3)　調査報告書の作成

(4)　その他必要な事項

(職員)

第4条　センターに，次の職員を置く。

(1)　センター長

(2)　主任

(3)　その他必要な職員

(センター長)

第5条　センター長は，本学の考古学に関連する教員のうちから国立大学法人鹿児島大学学内共同教育研究施設等人事委員会(以下「委員会」という。)の意見を参考にして，学長が選考する。

2　センター長は，センターの業務を掌理する。

3　センター長の任期は2年とし，再任を妨げない。

4　センター長に欠員を生じた場合の補欠のセンター長の任期は，前任者の残任期間とする。

(主任等)

第6条　主任は，センターの職員の中から，特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を委員会が推薦し，学長が選考する。

2　主任は，センター長の命を受けてセンターの業務を処理する。

3　職員は，センターの業務に従事する。

(事務)

第7条　センターに関する事務は，施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条　この規則に定めるもののほか，センターに関し必要な事項は，別に定める。

附　則

1　この規則は，平成16年4月1日から施行する。

2　この規則の施行後，最初の室長は学長が指名した者をこの規則により選考したものとみなす。

附　則

この規則は，平成22年1月29日から施行する。

附　則

この規則は，平成24年4月1日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会（平成23年4月1日現在）

委員長　新田栄治（埋蔵文化財調査室　室長）
委員　本田道輝（法文学部）
竹内　宏（教育学部）
笠井聖仙（理学部・理工学研究科）
吉留厚子（医学部）
山中淳之（歯学部）
白樂善則（工学部）
松元光春（農学部）
山田章二（水産学部）
小片　守（医歯学総合研究科）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室（平成23年4月1日現在）

室長（併）	法文学部教授	新田栄治
主任	准教授	中村直子
	助教	新里貴之
	特任助教	寒川朋枝
	技術補佐員	東　友子
		濵田綾子
		赤尾和洋

Ⅰ　平成23（2011）年度の事業概要

平成23（2011）年度は，発掘調査2件，試掘調査2件，立会調査10件を実施した(Tab.1)。遺物整理作業は5件，刊行物として発掘調査報告書第7集，年報26を刊行した。そのほか，遺物保管作業5件，公開講座1件，遺跡・遺物見学の対応を2件，これまでの普及啓発活動の記録の公表1件，遺物資料貸出1件を実施した。

そのほか，鹿児島大学構内遺跡や脇田亀ヶ原遺跡が他機関によって公表された事例も掲載する。

Tab.1　平成23（2011）年度事業一覧

事業	コード名	調査区		工事名称	担当者	期間
発掘	2011-1	郡元	R～T-7～9	附属中学校改修工事その他工事	新里	2011年7月6・7日，8月2～12日，9月14日～10月13日
試掘	2011-2	桜ケ丘	D-E-7-8	基幹整備工事	新里	2011年7月13日～21日
発掘	2011-3	桜ケ丘	D-E-7-8	基幹整備工事	新里	2011年11月14日～2012年3月13日
試掘	2011-4	郡元	H-I-3-4	学習支援センター建設	宮川	2012年1月6～26日

事業	コード名	調査区		工事名称	担当者 市教委	担当者 調査室	期間
立会	2011-A	郡元	R～T-5～9	附属中学校グランド改修その他工事	野邑・末吉	宮川・新里	2011年4月22日，5月16・19・20日，6月3・13日，7月6日
	2011-C	桜ケ丘	E～F-3～5	医科外来棟前外来患者用駐車場工事・外灯設置	上村	宮川	2011年4月20日
	2011-D	桜ケ丘	C-4-5	駐車場整備工事・外灯設置	野邑	中村	2011年5月20日
	2011-F	郡元	F-4	総合研究博物館常設展示室撤水栓設置工事	末吉	宮川	2011年7月11日
	2011-G	桜ケ丘	E～O-4～10	基幹整備(エネルギー管理設備等)工事	野邑	宮川	2011年9月6日
	2011-H	郡元	B～T-3～13	基幹整備(エネルギー管理設備等)工事	末吉	宮川・中村	2011年8月30日，9月8～9・14・27・29日，10月3・5・6・8・15・25日
	2011-I	郡元	J-K-11-12	海洋土木工学科機等使用改修工事	上村	宮川	2011年12月5日
	2011-J	桜ケ丘	F-10	基幹整備(本館パイオマスボイラ設備)工事		新里	2011年11月14・15日
	2011-K	桜ケ丘	I-8	難治ウイルス病感染制御研究センター非常電源幹線工事	末吉	中村	2012年1月26日
	2011-L	郡元	L-12	稲盛会館外壁改修工事	末吉	宮川	2012年2月1日

事業	コード名		内容	事業	担当者
遺物整理	2008-1	桜ケ丘	桜ケ丘中央図書館工事	洗浄・注記・実測・トレース	中村・宮川・末・梁田・赤尾
	2009-4	桜ケ丘	桜ケ丘新病棟建設工事	洗浄・注記・実測・トレース	中村・宮川・末・梁田・赤尾
	1976-1	郡元	理学部2号館地点予定地(前田第8地点)発掘調査	洗浄・注記	新里・宮川・末・梁田・赤尾
	2010-2-3	桜ケ丘	2010年度試掘調査	洗浄・注記・実測・トレース	宮川・末・梁田・赤尾
	2010-A～I	郡元・桜ケ丘	2010年度立会調査	洗浄・注記・実測・トレース	宮川・末・梁田・赤尾

事業	内容		担当者	発行
刊行物	報告書	鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書　第7集	中村・宮川・新里	2011年3月
	年報	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報　26	宮川・中村・新里	2011年3月

事業	内容		担当者	期間
遺物保管	遺物収蔵状況確認	15か所	中村・新里・宮川	2011年5・6月
	収蔵場所水洗	埋工：総合研究棟地下1F	新里・末・梁田・赤尾	2011年6月3～7日
	収蔵場所移動	埋工：総合研究棟地下1F～5F	中村	2011年12月9日
	収蔵場所移動	農学部共同利用棟作業場所移動	宮川・末・梁田・赤尾	2012年2月27日
	木製品保管水槽の水かえ	2か所	中村	2012年3月26～29日

事業	内容		担当者	期間
その他	公開講座	『原始古代のものづくり』「石器の作り方」	宮川	
		「ヤマウガイの貝を用いた製品について」	新里	2011年7月23日
		「土器の作り方」	中村	
	遺物見学	2011-1附属中学校調査：附属中学校生2名	中村	2011年7月21日
	遺跡見学・遺物整理作業体験	2011-3桜ケ丘調査：桜ケ丘東小学校生2名	新里	2011年12月26日
	調査室のアウトリーチ活動報告	『埋蔵文化財調査室における啓発・啓発活動』『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報』第8号	新里	2011年11月30日
	遺物資料貸出	鹿大総合研究博物館：桜ケ丘団地出土石器	中村	2011年4月19日
	金山修一	「くかごしまさ（いにしえ）散歩40」<郡元鹿大学構内遺跡・郡元団地(郡元遺跡)」『南日本新聞』		2011年4月1日
	南日本新聞社	「<桜ケ丘調査>縄文時代も宅地」『南日本新聞』		2011年12月13日

Fig.1　鹿児島大学構内遺跡郡元団地と脇田亀ヶ原遺跡桜ケ丘団地 (1/25000)

国土地理院鹿児島南部 1：25000（平成 16 年発行を改編）

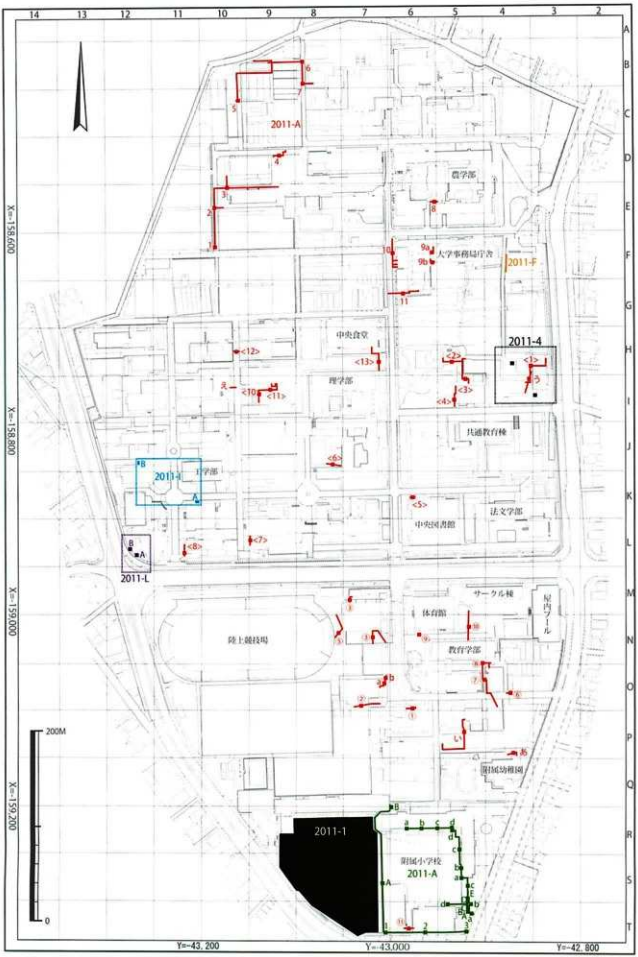


Fig.2　鹿児島大学構内遺跡郡元団地 (1/4000)

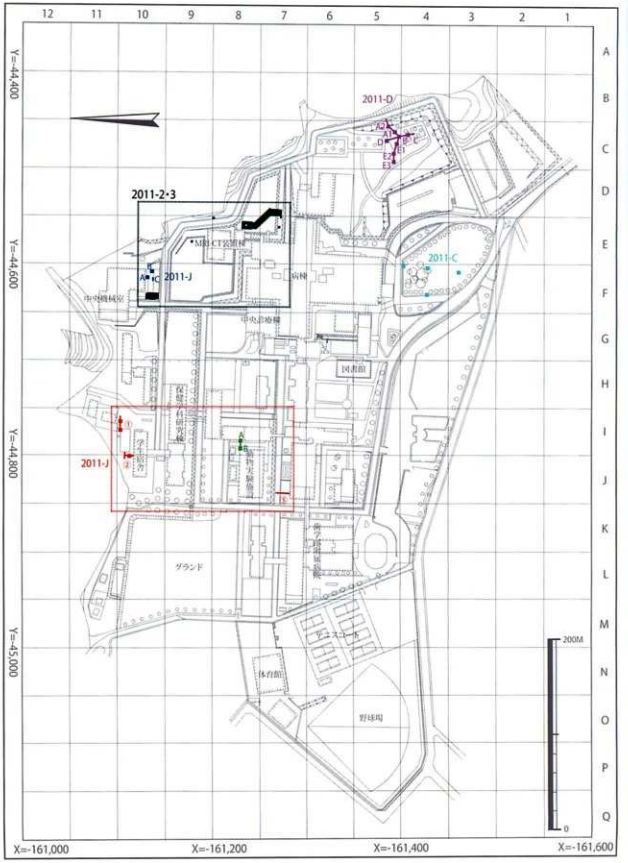


Fig.3 脇田亀ヶ原遺跡桜ケ丘団地 (1/4000)

Ⅱ　発掘調査の概要

ここでは，平成 23（2011）年度に行なわれた発掘調査 2 件の概要報告を掲載する。鹿児島県教育委員会に提出したものに一部加筆・修正を行ない，編集し直している。

2011-1　郡元団地 R ～ T-7 ～ 9 区（附属中学校改修工事その他工事）発掘調査

1　調査にいたる経過

鹿児島大学では，平成 22（2010）年 10 月の集中豪雨の際，郡元団地教育学部附属中学校内グランドが冠水したため，排水能力を高めるための雨水排水改修工事が予定された。

同地点の北側には，県立医大遺跡（昭和 26/1951 年調査）や附属中学校敷地内遺跡（昭和 38/1963 年調査）の古墳時代の円形住居跡があり，プール上屋取設工事（平成元 /1989 年調査）の際，住居跡の存在が確認され，照明灯設置地点（平成 6/1994 年調査）では古墳時代の竪穴住居跡・土坑・ピット群，古代の土坑群，縄文時代前期の曾畑式土器の安定的出土が認められる。体育館の増築工事（平成 15/2003 年調査）の際には古墳時代の方形住居跡 5 軒以上，平成 21（2009）年度の校舎耐震工事のための調査では，校舎の南北で竪穴住居跡や土坑・ピット群が確認されている。特に，郡元団地内では古代の遺構・遺物が僅少なことから，埋蔵文化財調査センターにおいては，附属中学校付近は古墳時代集落跡，古代の生活痕跡のあった地点として注意している。このことから，今回の改修工事に先立ち，埋蔵文化財の試掘調査を行なう必要が生じた。

平成 23（2011）年 7 月 6・7 日に，遺物包含層残存箇所と表土層の厚さを確認する試掘調査が行われ，古墳時代包含層の存在を絞り込んだ。調査場所がグランドであり，体育祭などを 9 月前半に控えていたため，8 月と 9 月後半からの調査に分け，それぞれ 1 期工，2 期工とした。

2　調査体制

所　在　地　鹿児島市郡元 1-20-15
調査　起因　附属中学校グランド改修工事
発掘主体者　鹿児島大学埋蔵文化財調査室長　教授　新田栄治
発掘指導員　鹿児島大学埋蔵文化財調査室員　助教　新里貴之
管理　技師　国際文化財株式会社　川口洋次郎（1 期），中野　剛（2 期）
調　査　員　国際文化財株式会社　中村祐一（1 期），島越道臣（2 期）
作　業　員　加治屋幸雄・川越まゆみ・川俣友秀・北村浩士・桐木平雅代・久士目誠・芝田恵子・下田まき子・高山重光・地島幸代・八塚千城・安永政一・山下キヨミ・脇　満則（五十音順）
発掘　期間　平成 23（2011）年 7 月 6・7 日（試掘）
　　平成 23（2011）年 8 月 2 日～ 8 月 12 日（1 期工）
　　平成 23（2011）年 9 月 14 日～ 10 月 13 日（2 期工）
探査　期間　平成 23（2011）年 9 月 12 日（地中レーダー探査）
　　中村直子・新里・寒川朋枝（埋蔵文化財調査室），深川祐子（鹿大 4 年次），松崎大嗣（東海大 4 年次），有木仁志（鹿国大 2 年次）
調査　面積　404.3㎡
探査　面積　6050㎡（グランド西半部）
遺跡の現状　附属中学校グランド

3　調査経過

今回の調査は，鹿児島県教育委員会との協議により，グランド周辺の深い側溝の付け替えとグランド内を縦横に走る暗渠の付け替え部が調査区となり，かつ，工事の掘削最大深度までを対象とすることになった。試掘調査によって，工事掘削深度までに，主にグランド北西側と南東側に偏って遺物包含層が存在すること

が確かめられた。また，9月前半の附属中学校体育祭前後は，グランドを一度埋め直して整備し直す必要が生じたため，1期工はグランド南側の側溝部を中心とし，2期工で北側側溝と暗渠部を調査することとなった。

1期工では，途切れた比較的細長い調査区となるため，調査順にルート1（東側）・ルート2（南側）と区分した。ルート1は8月2日より重機による表土剥ぎを行なった。50cm深度であったため，ほとんどが撹乱範囲で収まった。下部に遺物包含層が存在するかを確認するため，北側の一部を深掘りしたところ，良好な遺物包含層とともに溝（SD1）が検出された。完掘写真と北側深掘り部を壁面写真測量し，8月5日に終了した。ルート2も8月2日より重機による表土掘削を開始し9日まで行なわれた。表土掘削の開始される東側から，掘削ルートのクランクごとにa～d地点と便宜的に地点を区分した。基盤層である5層上面の状況からみると，東側（a地点）の旧地形は深く，120cmの工事深度でようやく基盤層が検出されたが，西側に行くにつれ徐々に浅くなり，d地点では表土掘削後50cmほどで削平された基盤層が検出された。a～c地点では，古墳時代と考えられる基盤層に掘り込まれた土坑やピットが検出されたが，工事深度までの調査であるため，遺構を完掘することができず，遺構の性格を確認できなかった。d地点では，古代の土坑が浅い箇所で検出されたため，完掘するため，1期工の最終日8月12日まで調査を行なった。

2期工直前の9月12日は，1期工で検出された古代土坑群の拡がりを確認するため，鹿大所蔵の地中レーダー探査機で調査を行なった。

2期工は9月14日から開始された。2期工も1期工に合わせて掘削順にルート名を3～10まで名づけ，クランクのあるルート3は南側をa地点，西側をb地点とし，最も深い側溝であるルート7は西側から東側にむかってa～d地点とした。暗渠設置部であるため浅い掘削部となったルート3～6・8～10ではルート5・6で遺物包含層が一部掘削されたものの，ほとんどが撹乱層の範囲内となり，9月21日までに終了した。ルート7では，2基の竪穴住居跡のほか，多数の土坑，ピット群が検出されたため，調査の重点が置かれた。東側（ルート7d）は，全体が撹乱を受け，遺物包含層は残っていなかった。10月13日までに写真撮影，測量を終えて，全ての発掘調査を終了した。

4　基本層位（PL.1・2）

ここでは，基盤層まで調査を行なったルート2，ルート7の土層を紹介する。

南側に位置するルート2bとルート7を総合すると，基本土層として，大別して5枚の層が確認された。1層の表土・撹乱層，2層の近代水田層，3層の近世水田層（a・bに細分），4層の古墳時代・古代包含層（a～b層に細分），5層の砂層基盤である。5層は基本的に無遺物層であるが，ルート7c地点では，直上に縄文時代前期の曾畑式土器が出土することがある（pit117・176）。また，地点ごとにやや異なる細分ができる箇所もある。

1層：表土ならびに鹿児島大学時代の造成土層。それ以前と考えられる水田層もブロック状に混じる。重機により掘削。

2層：近代の水田層。今回，重機で掘削したため，遺物は少ない。黒褐色10YR3/2砂質シルト。0.5～5cm大のパミス混じり。しまり良い。

3層：近世の水田層。今回，重機で掘削したため，遺物は少ない。遺構も少ない。

　a層：灰黄褐色10YR4/2砂質シルト。0.5～5cm大のパミス混じり。しまり良い。

　b層：暗褐色10YR3/4砂質シルト。0.5～5cm大のパミス混じり。しまり良い。

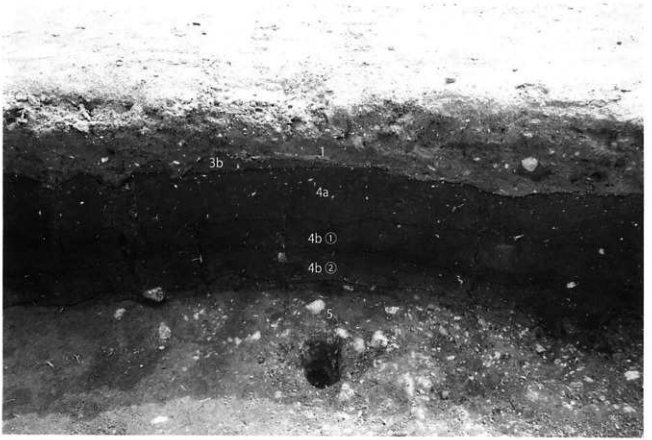
4層：古墳時代-古代の遺物包含層。

　a層：黒褐色10YR2/3砂質シルト。0.5～5cm大のパミス混じり。しまり良い。遺物が多い。

　b層：4b層と5層の混じり土。場所によって①・②に細分される。①は低い場所に堆積している。黒褐色10YR2/2砂質シルト。0.5～5cm大のパミス混じり。しまり良い。遺物が多い。

5層：郡元団地の基盤となっている砂層。この層の直上で古墳時代・古代の遺構が明瞭に確認できる。基本的に人工遺物は含まれない。細分は行なっていない。にぶい黄褐色10YR4/3粗砂。脆い。

PL.1　ルート 2b 北壁



PL.2　ルート 7c 南壁

5　各調査区と遺構（Fig.4・5）

本調査では，側溝幅 120cm 程度にも関わらず（暗渠幅は 50cm），竪穴住居跡 2 基，溝 3 基，土坑 31 基，ピット 285 基が確認されている。ほとんどが古墳時代に属すと考えられるが，近世土坑 1 基，古代土坑 10 基も確認されている。古代の土坑群は集中する様子が確認されたが，その他の遺構に関しては，配列など有意な情報を掴むことができない状況であった。

古代の土坑（SK1 ～ 10）はルート 2d に集中している。平面規模は 80 ～ 120cm の楕円形を呈し，深さ 0.5 ～ 100cm となっている。レンズ状堆積する埋土ではなく，一気に埋められた感があった。埋土中からは古代の土師器を主体に，鉄鏃などが出土している。古代の土坑は全ての土壌を取上げ，調査終了後，調査ベルト部分に関してはウォーター・フローテーションし，植物遺体ほかの検出作業を行なったが思わしい成果が出なかった。そのため，残り（1491.5ℓ）はフルイがけ（5mm メッシュ）を行ない，遺物回収をした。また，この集中する土坑群の面的な拡がりを確認するために，グランド西半部の 6000㎡余を地中レーダー探査（Sensors & Software 社製 NOGGIN PLUS：アンテナ 250hz）した。年度末に解析が終了したが，遺構等が確認できるような有意な結果はでなかった。

ルート 1 北端とルート 7a・7c で確認された溝（SD1・2・3）は，幅 60cm と小規模で，調査された SD2 は，断面逆台形状で深さは 20cm 程度，遺物も出土しなかった。

ルート 7b と 7c で確認された竪穴住居跡（SI01・02）は，全形は不明であるが，方形住居と推定された。埋土からはどちらも掘床と貼床が検出された。SI01 は 5 層上面で検出されたため浅く，一辺は 4.3m，貼床から掘床までの深さ 10cm 程度である。SI02 は，4b 層上面から検出されかなり深く，一辺は 3.8m，検出面から貼床まで 62cm，貼床から掘床までの深さが 33cm である。床面に薄い炭の層が検出された。遺物は小破片で古墳時代の土師器が出土している。

古墳時代と確定できる土坑・ピットは，ルート 7 で検出されている。いずれも土器が埋納されたもので，pit89 は 25 ～ 45cm の隅丸菱形の平面形に，43cm の深さをもつ段掘りの土坑で，東原式土器古段階の小型壺が口縁部を打ち欠かれた状態で出土した。また，土坑（SK28）は 30 × 35cm の楕円形状，深さ 40 ～ 43cm の土坑内に，東原式土器古段階の甕 2 個体（1 個体はほぼ完形，もうひとつは口縁部と脚のみ），口縁部のみの壺 1 個体の 3 個体分が出土している。平成 21（2009）年度の調査も併せて，東原式土器の埋納土坑例が増加した。

各調査区で無数のピットが検出されている。配列不明で時代を特定できるものが少ないが，検出面から考えて概ね古墳時代におさまるものと考えられる。そのなかで，p117・176 では，5 層基盤層との境界付近で縄文時代前期の曾畑式土器が出土し，縄文時代前期の生活痕跡が平成 6（1994）年調査の照明灯設置地点から南側にややや拡大することが判明した。

6　遺物

遺物は小破片がほとんどであった。古墳時代の土器を中心に，土師器，近世・近代の陶磁器，鉄器，石器類がある。全形の窺えるのは，古墳時代東原式土器の甕・壺のほか，古代の土師器の坏，鉄器である。

7　まとめ

本調査地点は，側溝や暗渠部分の調査であるために，遺構等の全体像を知ることは困難であったが，良好に遺物包含層が存在していることが判明した。古墳時代の住居跡，溝，東原式土器の埋納土坑の存在，古代土坑群の集中，曾畑式土器の出土など，郡元団地の古墳時代集落群，縄文時代前期・古代生活痕のなかでも重要な位置づけとなる地点である。今回のようにグランドのような広域でみると，旧地形は起伏があり，場所によってかなり良好な遺物包含層と遺構が残存している。附属中学校敷地内における工事に際しては，今後も慎重な対応が必要であろう。

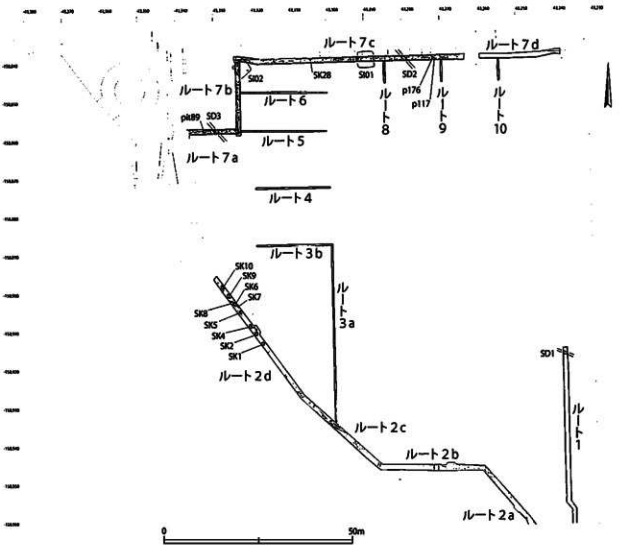


Fig.4　調査区と主要遺構配置（1/1000）

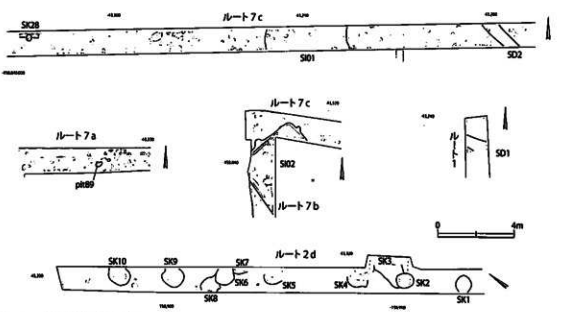


Fig.5　主要遺構（1/200）

PL.3　ルート 2d 検出古代土坑（北西より）

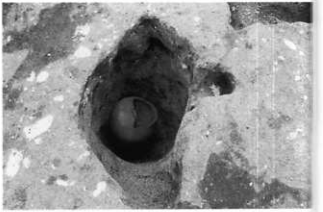
PL.4　古代土坑（SK10）出土鉄製品（東より）

PL.5　古代土坑（SK5）出土円盤状製品

PL.6　ルート 7 検出竪穴住居跡（SI02）（北より）

PL.7　ルート 7c 検出溝（SD2）（南より）

PL.8　ルート 7c 土坑（SK28）埋納土器（南より）



PL.9　ルート 7a ピット（pit89）埋納土器（東より）

2011-3　桜ケ丘団地D・E-7・8区（基幹整備工事）発掘調査

1　調査にいたる経過

脇田亀ケ原遺跡桜ケ丘団地（図1）では，平成23（2011）年度に新病棟（2009年度調査）につながる共同溝の設置を予定している。予定地近隣では，新病棟調査（平成21/2009年度）で，後期旧石器時代～縄文時代草創期の落し穴，小型ナイフ形石器，中央機械棟（平成20/2008年度）・中央診療棟（平成19/2007年度）・MRI-CT棟（平成7/1995年度）などで，後期旧石器時代の細石刃や縄文時代草創期・早期の土器・石器などが出土しており，共同溝敷設予定地においても同様の遺物が出土することが予想された。予定地の共同溝ルートについては，大半が陸橋上の敷設で埋蔵文化財に影響はないが，一部，現・駐車場内を掘削し，地下に埋設する計画がとられた。そのため，埋設部分の遺物包含層の有無や深さを知るために試掘調査を行ない，本調査へむけてのデータをとることとなった。平成23（2011）年7月13日～21日にかけて試掘調査を行なったところ，駐車場（試掘b・c）では，3mの深度でも遺物包含層に達しなかった。駐車場から約4m下の小段となっている試掘aでは，サツマ火山灰層下にチョコ層の存在が認められた（Ⅲ試掘調査参照）。そのため，駐車場部分（調査区A・B）では，掘削できなかった3～4m間に遺物包含層が存在していると捉え，発掘調査を行なうこととなった。ただし遺物包含層まで掘削することになると，かなりの深度になることから，矢板で壁面を保護してからの調査となり，鹿児島県教育委員会との協議により，安全面と地盤強度費用の状況に鑑み，工事掘削深度までの発掘調査を行なうこととした。また，バイオマスボイラ埋設箇所（調査区C）も新たに調査区に加わった（Fig.6・7）。

2　調査体制

所　在　地　鹿児島市桜ケ丘8-35-1
調査　起因　共同溝埋設
発掘主体者　鹿児島大学埋蔵文化財調査室長　教授　新田栄治
発掘指導員　鹿児島大学埋蔵文化財調査室員　助教　新里貴之
管理　技師　株式会社江藤建設工業　徳永睦雄
調　査　員　国際文化財株式会社　長尾聡子(11/17～)・川田秀治（～2/3）
作　業　員　岩切ひとみ・緒方宏介・加治屋幸雄・川畠勲・上拾石キヨ子・川越まゆみ・川俣友秀・北村浩士・桐木平雅代・久土目誠・芝田恵子・下田まき子・高山重光・安永政一・山下キヨミ・脇　満則（五十音順）
調査　期間　平成23（2011）年11月14日～平成24（2012）年3月14日
探査　期間　平成24（2012）年2月16日（地中レーダー探査）
調査　面積　362.34㎡
遺跡の現状　駐車場・バイオマスボイラ施設

3　調査経過（Fig.6・7）

試掘結果を受け，駐車場（調査区A：208.4㎡・B：81㎡）とバイオマスボイラ設置地点（調査区C：81㎡）を発掘調査することとなった。調査区Bは，約10m深度で掘削する工事であるため，調査区A・C終了後に行なうこととし，調査区Aは日鋼・矢板設置，表土掘削までに約1カ月を要するという工事計画のため，調査区Cから調査することとなった（平成23/2011年11月16日～12月20日）。調査区Cの大半は，サツマ火山灰層上部まで掘削されていたので，表土からサツマ火山灰まで重機で除去した。その後，チョコ層を全面調査した。12月5日には，北側追加部分の掘削が開始され，同様に調査を行なった。チョコ層からは黒曜石・安山岩のチップやフレイクが出土したが，遺構は検出されていない。各遺物の出土状況写真，測量などを行ない，調査を終了した。

調査区Aは，12月12日より表土の掘削を開始した。表土除去後，旧地形の高かったと考えられる北側ではサツマ火山灰層が，南側では縄文時代早期層が検出された。また，一部，桜ケ丘団地造成前の畑跡の段

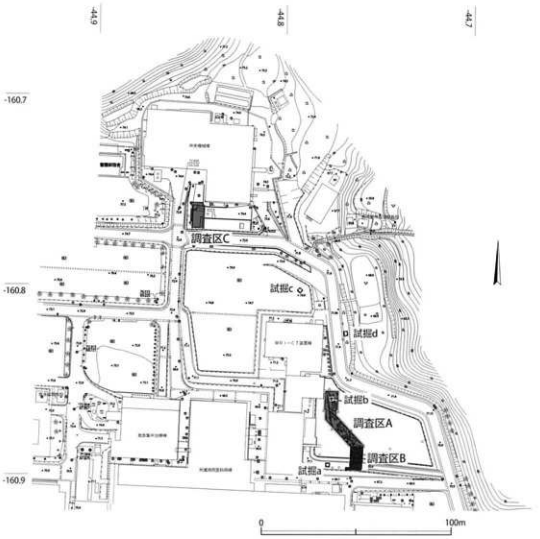


Fig.6　トレンチ配置（1/2000）

落ち部分が検出され，そこには部分的にアカホヤ火山灰層二次堆積土も確認された。縄文時代早期層では，加栗山式・吉田式土器などが出土したが，遺構は確認されず，ほとんど樹痕や横位横転の痕跡のみであった。これらの写真撮影，測量などを終え，工事深度であるサツマ火山灰層除去まで行なって，調査区Ａの調査も終了した（平成24/2012年１月23日）。

調査区Ｂは，平成24（2012）年１月11日より表土掘削が開始された。同地区は，工事深度が10mを越えるため，チョコ層の掘削調査も行なった。表土除去したところ，北半部に縄文時代早期層が確認され，小段部分はサツマ火山灰層上部まで削平されていた。１月31日までに縄文早期層は完掘したが，やはり樹痕と層位横転のみで，明確な遺構は確認されていない。

２月16日に全てのサツマ火山灰層を除去し，地中レーダー探査後，チョコ層の掘削を開始した。地中レーダーにはいくつかの反応がみられたものの，発掘によれば若干の土層の落ち込みに反応したものであると考えられた。ここでは，チップやフレイクもほとんど確認されなかったことから，時間の関係上，中央部のみを掘削し，３月13日，全体・壁面写真を撮影・測量し，発掘調査を終了した。

調査期間の12月26日には，新聞記事をみた桜ケ丘東小学校の小学生２名が現場を訪れ，遺跡の概要説明や，遺物の見学，遺物洗浄の体験を行なった（Ⅷ　その他の事業参照）。

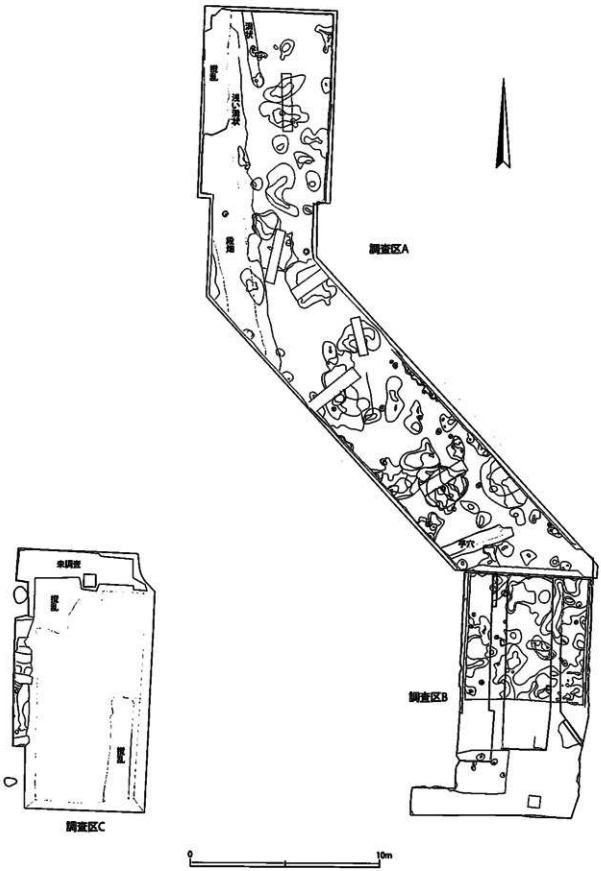


Fig.7　各トレンチ (1/200)

4　基本層序（PL.12・13）

原地形は北側が高く，南側に低い。縄文時代後期～古代の遺物包含層（クロボク土）は削平されており，今回検出されなかった。

1 層：撹乱・盛土。

2 層：桜ケ丘団地造成直前の旧耕作土。黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。0.5 ～ 1cm 大のオレンジパミスまじり。底面に鉄分を多く含む。造成時の填圧のためか，かなり堅く締まっている。

3 層：褐色 10YR4/4 シルト。0.5 ～ 2cm 大のオレンジパミスまじり。締まり良い。アカホヤ火山灰二次堆積土。遺物包含層。

4 層：黒褐色 10YR2/2 砂質シルト。0.5 ～ 5cm 大のオレンジパミスまじり（多）。縄文時代早期層。遺物包含層。

5 層：全体的には褐色 10YR4/4 を呈する。サツマ火山灰。無遺物層。0.5 ～ 5cm 大のパミスと砂，シルトが互層をなしている。

6 層：いわゆるチョコ層。粘質。a ～ d 層に細分される。遺物包含層。

a 層：黒褐色 10YR2/2 シルト。粘性強い。チョコ層の中でも最も堅くなる。

b 層：暗褐色 10YR3/3 シルト。粘性やや強い。6a 層よりも柔らかい。

c 層：にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト。粘性強い。サラサラした感触。

d 層：黒褐色 10YR2/3 シルト。粘性かなり強い。チョコ層のなかで最も水分を多く含む。

7 層：いわゆるシラス。無遺物層。

a 層：褐色 10YR4/4 シルト。0.1 ～ 2cm 大の明褐色 7.5YR5/8 パミス粒を少量含む。かなり締りがよく，粘性が弱い。

b 層：褐色 10YR4/4 シルトに 0.1 ～ 3cm 大の明褐色 7.5YR5/8 パミス粒が集中して含まれる層。部分的にパミスが消失する部分もある。桜島起源の P17 に相当する。かなり締りがよく，粘性が弱い。

c 層：褐色 10YR4/4 シルト。0.1 ～ 1cm 大の明褐色 7.5YR5/8 と 0.5 ～ 3cm 大の明黄褐色 2.5Y6/6 パミス粒を少量含む。締りがよく，粘性が弱い。

5　遺構

試掘トレンチ，調査区ともに明確な遺構は検出されなかった。

調査区 A では，表土除去後，桜ケ丘団地造成直前の畑跡や芋穴が検出されている。畑跡の段落ちは，造成前の図面と合致している。

縄文時代早期層掘削中やサツマ火山灰層上面では，樹痕や層位横転（PL.14）が検出された。

6　遺物

遺物は，縄文時代では早期の前平式・加栗山式・吉田式土器のほか，多量の円礫が出土している（PL.15）。調査区 A では吉田式土器が目立ち，これまでの桜ケ丘団地の前平式土器主体の状況と若干趣を異にしている。後期旧石器時代～縄文草創期のチョコ層では，黒曜石や安山岩製のチップやフレイクが出土しているが（PL.16・17），桜ケ丘団地でも標高の高い調査区 C に多い。

7　まとめ

今回の調査地点の遺物の包蔵状況は比較的良好であり，工事の際には慎重な対応が必要である。今回は，埋蔵文化財調査室でこれまでに行なったことのない，矢板を設置しての深部の調査であった。盛土が 3m 以上もあることは試掘調査前には予想されていなかった場所であった。

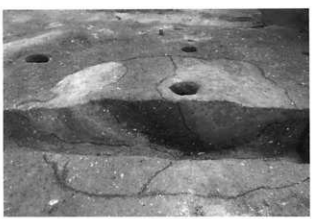
これまでの調査状況から考えて，桜ケ丘団地では，縄文時代早期でも地点ごとに年代の異なる遺物を包蔵した遺物包含層が残っていると考えられることから，今後，団地内の深部を掘削する場合，このような矢板工法を行なって発掘調査すべきであると考えられる。

PL.10　調査区 A・B 遠景（南より）

PL.11　調査区 C（北より）

PL.12　調査区 A 西壁土層

PL.13　調査区 C 西壁土層



PL.14　調査区 A 4 層上面層位横転

PL.15　調査区 A 4 層出土土器

PL.16　調査区 C 6a 層出土石器

PL.17　調査区 C 6d 層出土石器

Ⅲ　試掘調査

ここでは，平成 23（2009）年度に行なわれた試掘調査 2 件の正式報告を行なう。鹿児島県教育委員会に提出した発掘調査概要報告書に一部加筆修正し，編集し直した。

2011-2 桜ケ丘団地 D･E-7･8 区（基幹整備工事）試掘調査

1　調査にいたる経過

鹿児島大学構内遺跡桜ケ丘団地（図 1）では，平成 23（2011）年度，新病棟（2009 年度調査）につながる共同溝の造営を予定している。予定地近隣では，新病棟調査（平成 21/2009 年度）で，後期旧石器時代～縄文時代草創期の落し穴，ナイフ形石器，中央機械棟（平成 20/2008 年度）・中央診療棟（平成 19/2007 年度）・MRI-CT 棟（平成 7/1995 年度）などで，後期旧石器時代の細石刃や縄文時代草創期・早期の土器・石器などが出土しており，共同溝敷設予定地においても同様の遺物が出土することが予想された。予定地の共同溝ルートについては，大半が陸橋上の敷設で埋蔵文化財に影響はないが，一部，現・駐車場内を掘削し，地下に埋設する計画がとられた。そのため，埋設部分の遺物包含層の有無や深さを知るために試掘調査を行ない，本調査へむけての土層データをとることとなった。平成 23（2011）年 7 月 13 日～21 日にかけて試掘調査を行なったところ，駐車場（試掘 b･c）では，3m の深度でも遺物包含層に達しなかった。駐車場から約 4m 下の小段となっている試掘 a では，サツマ火山灰層下にチョコ層の存在が認められた。そのため，駐車場部分（試掘 b）では，掘削できなかった標高 3 ～ 4m 間に遺物包含層が存在していると捉え，後日，発掘調査を行なうことに決定した。

2　調査体制

所　在　地　鹿児島市桜ケ丘 8-35-1
調査　起因　共同溝埋設予定地の試掘調査
発掘主体者　鹿児島大学埋蔵文化財調査室長　教授　新田栄治
発掘指導員　鹿児島大学埋蔵文化財調査室員　助教　新里貴之
管理　技師　国際文化財株式会社　川村　稔
調　査　員　国際文化財株式会社　川田秀治
作　業　員　加治屋幸雄・川俣友秀・久士目誠・髙山重光・安永政一・脇　満則（五十音順）
発掘　期間　平成 23 年 7 月 13 日～ 7 月 21 日
調査　面積　16㎡
遺跡の現状　駐車場・道路脇

3　調査経過（Fig.6）

調査地点を 2 × 2m 規模の 4 箇所とした。試掘 a は駐車場小段部分，試掘 b・c は駐車場，試掘 d は道路脇部分である。平成 23（2011）年 7 月 13 日より開始した。

試掘 b・c は，重機で 2m まで掘削したが，遺物包含層に達せず，盛土であることが判明した。そこで，重機によって，さらに深度 3m まで掘削して確認したが，盛土のままであった。

試掘 a は駐車場のスロープがあって重機が入らないため，人力による掘削を行なったところ，表土下にサツマ火山灰上面が確認されたため，これを人力で除去した。地表下 2.1m でチョコ層が確認され，写真撮影・写真測量を行ない，調査を終了した。

試掘 b の結果から駐車場から 3m 深度までは盛土であること，駐車場から 4m 下の小段に位置する試掘 a からサツマ火山灰層の上面が検出されていることから，3 ～ 4m 深度に縄文時代の遺物包含層が残存していることが予想された。

試掘 d は道路脇の崖にむかう傾斜地であるので，2.7 × 1.5m のトレンチとした。ここでは，旧耕作土が

厚く堆積し，2m 下にアカホヤ層が確認された。写真撮影・写真測量を行ない，全ての調査トレンチを埋め戻して調査を終了した（7 月 21 日）。

4　層序と各トレンチの状況（Fig.8）

原地形は北側が高く，南側に低い。縄文時代後期～古代の遺物包含層（基本土層 2 層）と縄文時代早期層（基本土層 4 層）は削平されており，今回検出されなかった。

＜試掘 a ＞

1a 層：榎ケ丘団地造成時の撹乱・盛土。

5 層：サツマ火山灰。無遺物層。

a 層：黄褐色 10YR5/6 パミス。0.5 ～ 5cm 大。脆い。

b 層：橙色 7.5YR6/6 粗砂。かなり堅い。

c 層：明橙色 7.5YR5/8 粗砂をベースに，0.5 ～ 20cm大のパミスまじり。かなり脆い。

d 層：明橙色 7.5YR5/8 シルトに 0.5 ～ 10cm 大のパミスがまじる。しまり良い。

e 層：明橙色 7.5YR5/8 粗砂をベースに，0.1 ～ 0.5cm 大のパミスまじり。脆い。

f 層：明橙色 7.5YR5/8 シルト。0.5 ～ 5cm 大のパミスまじり。しまり良い。

g 層：明橙色 7.5YR5/8 粗砂をベースに，0.1 ～ 0.5cm 大のパミスまじり。脆い。

h 層：明橙色 7.5YR5/8 シルト。0.5 ～ 5cm 大のパミスまじり。しまり良い。

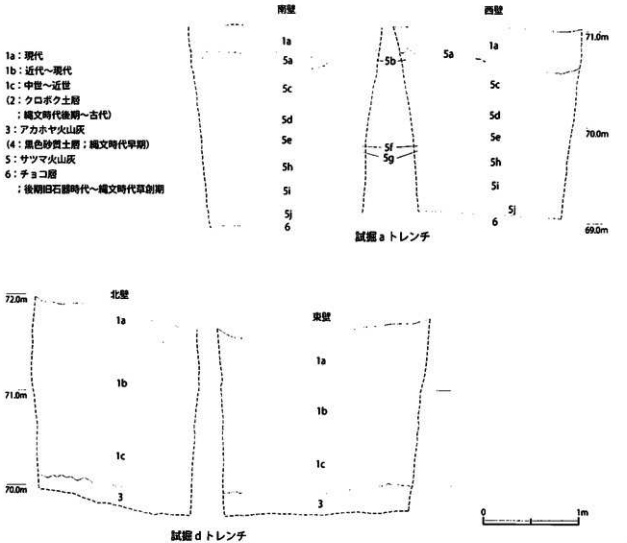


Fig.8　試掘 a・試掘 b トレンチ（1/40）

i 層：橙色 7.5YR6/8 パミス。0.5 ～ 5cm 大のパミスがびっしりと重なる。かなり脆い。
j 層：橙色 7.5YR6/8 粗砂。0.5cm 大のパミスまじり。かなり脆い。
6 層：チョコ層。遺物包含層。今回は掘削していない。
＜試掘 d ＞
1a 層：表土・腐食土。
1b 層：表土・腐食土層に類似するが，やや締まりが良い。
1c 層：桜ケ丘団地造成直前の旧耕作土。黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。0.5 ～ 1cm 大のオレンジパミスまじり。造成時の填圧のためか，かなり堅く締まっている。土器小破片が少量得られた。
3 層：褐色 10YR4/4 シルト。0.5 ～ 2cm 大のオレンジパミスまじり。締まり良い。アカホヤ火山灰二次堆積土。遺物が少量得られた。

5　遺構・遺物（Fig.9，PL.18，Tab.4）

今回の試掘調査では，遺構は確認されなかった。

遺物としては，b トレンチ撹乱層（1 層）下部でビニールパイプなどとともに，土器小破片が 2 点得られている。焼成・胎土などから弥生時代～古墳時代の土器と推察される。

d トレンチでは，1c 層より土器小破片 4 点，3 層より 1 点が得られている。1c 層の土器はいずれも無文小破片で，焼成・胎土などから弥生時代～古墳時代の土器と推察される。3 層より得られた 1 点は，三角突帯をもつ破片で，外面に横位の，内面に縦位のミガキを施している。弥生時代の壺と思われる。外面方向に反っており，器面が歪んでいた可能性がある。今回は確認されなかったが，本来 3 層の上部に存在したであろうクロボク土からの混入であると考えられる。

Fig.9　試掘 d トレンチ出土土器（1/3）

PL.18　試掘 d トレンチ出土土器

6　まとめ

今回の試掘調査では，2 × 2m の調査範囲で行なっていたが，予想以上に盛土深く，包含層の存在を明らかにし得なかった箇所が多い（試掘 b・c）。

試掘 a ではサツマ火山灰層とチョコ層が良好に残っており，このことから試掘 b では試掘深度の及ばなかった部分に遺物包含層が残存している可能性はある。

d トレンチは包含層の残存状況は比較的良好であり，工事の際には慎重な対応が必要である。

※共同溝の支柱埋め込み部分となる試掘 d トレンチ部分は，試掘調査を経て，鉄柱をそのまま埋め込み表土範囲内でフーチングを施す工法で支柱とすることになり，発掘調査は行なわないこととなった。

PL.19　試掘 a（東より）

PL.20　試掘 a 南壁

PL.21　試掘 b（南より）

PL.22　試掘 b 東壁

PL.23　試掘 c（北より）

PL.24　試掘 c 東壁

PL.25　試掘 d（北より）

PL.26　試掘 d 北壁

2011-4 郡元団地 H･I-3･4 区（学習支援センター建設）試掘調査

1　調査にいたる経緯

鹿児島大学では，郡元団地内において学習交流プラザ建設のための整備工事が予定された。工事地点は，鹿児島大学構内遺跡郡元団地中央部東側に位置し，周辺からは過去の調査によって縄文時代中期～近世にいたる複数の包含層が確認されている。工事地点南側には古墳時代の住居跡が密集しており，当該期の集落の中心部であると推定される。また，工事地点北側は旧河道にあたると推定され，本河道西側からは弥生時代から古墳時代の 3 ヶ所の井堰跡や大量の土器などが出土している。

今回の工事では，現有建物を解体後，校舎を改築する予定となっており，校舎部分は発掘調査が適切と思われるが，発掘が必要となる地点の周囲は住居跡と旧河道推定地両方を含むため，調査すべき包含層の深さ等が調査区内で大きな差が生じると予想される。発掘調査の工程や発掘調査費積算についても影響がでると思われるので，発掘調査に先立って工事地点の包含層の状況を確認するため試掘調査を行うこととなった。

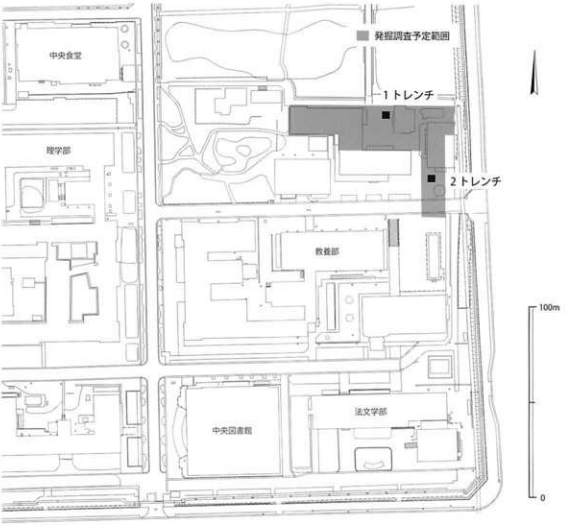


Fig.10　トレンチ配置（1/2000）

2　調査体制

所　在　地　鹿児島市郡元 1-21-24
調査　起因　2011-4 学習交流プラザ建設に伴う試掘調査
発掘主体者　鹿児島大学埋蔵文化財調査室長　教授　新田栄治
調査指導員　鹿児島大学埋蔵文化財調査室員　特任助教　寒川朋枝

管理　技士　大福コンサルタント株式会社　阿久根芳徳
調　査　員　大福コンサルタント株式会社　重富康宏
作　業　員　石谷美智子・岩戸和子・鹿倉征治・末吉幸子・末吉つや子・松下郁美・水迫久夫・行野良子・脇　秋江・脇　春教
発掘　期間　平成24（2012）年1月6日～1月26日
調査　面積　約50㎡
遺跡の現状　通路

3　調査の経過

これまでの調査では，本調査エリアの南側で住居跡群，西側では用河道が確認されているため，試掘調査はコープガイド西側の1トレンチと大学会館3号館南側の2トレンチの2ヶ所にトレンチを設定して状況を確認することとした。この2地点は新設校舎建設範囲内に該当する。試掘トレンチが河道にあたった場合，地表下4ｍまで包含層が達する可能性があるため，トレンチは5ｍ四方を設定し，土壌の状況を確認しながら安全確保のため小段を設定して掘り下げることとした。

調査は1月6日より1トレンチから着手した。舗装部分をカッティングし，重機で表土を掘削した。その際，地表下約20cmで調査区北側に土管と西側にコンクリート枡が検出された。この土管とコンクリート枡の下層は包含層が残存している状況であったが，トレンチの端であったため今回の試掘では撤去せずに残して他の部分を人力で掘り下げていくこととした。調査は，新しい層の上面もしくは遺構が確認された段階で写真・測量等の記録を行いながら掘削を行った。遺構は，3層上面で畝・溝跡，4ｂ層内で小ピット，5ａ層上面では浅い溝，5ｂ層上面では足跡の可能性のある浅い凹みが認められた。5ａ・5ｂ・5ｃ層の各上面には浅い凹凸や層の乱れがみられ，水田層としての使用をうかがわせる。5ｃ層では5基のピットと深さ約60cmの溝が検出され，ピットは半裁・完掘して記録をとった。溝については完掘し記録をとったが溝部分は検出面から残してその周囲を掘り下げることとした。1トレンチは1.7ｍを壁面垂直に掘り下げた後，下層確認のためトレンチ中央部に1×1ｍの深掘り小トレンチを設定して川砂が検出されるまで掘り下げた。1トレンチの掘削最深は地表下約2.5ｍとなった。

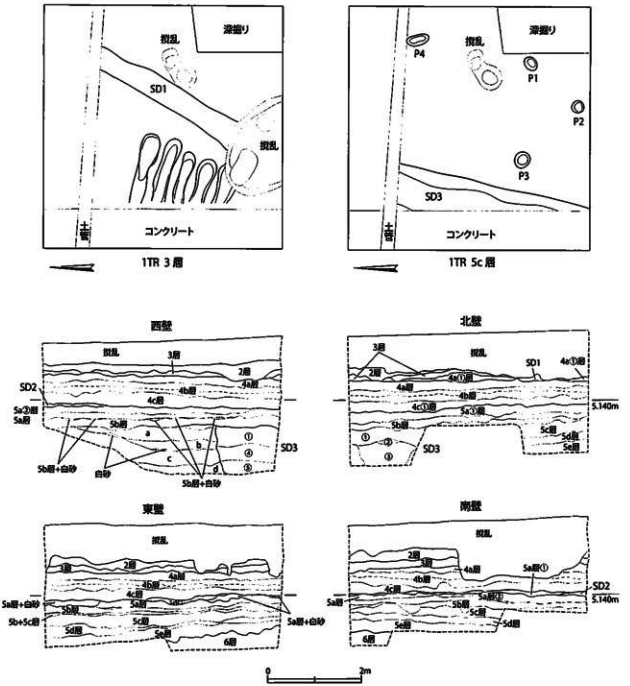
そして，1トレンチがほぼ砂層まで掘り上がった1月20日より2トレンチの調査に着手した。インターロッキングを撤去し，2層上面まで重機により掘削した。遺構は，4ａ層内で3層上を埋土とする小ピットを多数検出した。また，5ａ・5ｂ層上面では浅い凹凸など層の乱れが認められ，1トレンチ同様水田面としての利用が想定される。また，5ｂ層上面でもトレンチ北西隅に溝が2条検出されたが，検出面での記録のみを行い，本試掘では掘削せずに溝周辺部は残して掘り下げることとした。2トレンチは4ｄ層中位（地表下約135cm）で全面掘削を止め，中央部に1×1ｍの小トレンチを設定して下位層の確認を行い，粗い川砂が認められる面で掘削を終了した。2トレンチの最深部は約2.1ｍとなった。なお，両トレンチとも出土した細かい遺物については層ごとに一括でとりあげ，大きめの遺物については光波測量器によって座標を記録して取り上げた。1月26日に2トレンチの調査も終了し，1月31日に遺構を保護しながら埋め戻しを行い，周囲の清掃作業・撤収を行って調査を終了した。

4　基本層位（Fig.11・12）

トレンチによって層位堆積状況が異なるため，トレンチ毎に示す。各トレンチ内においても壁面毎で堆積状況がやや異なっているが，1トレンチは東壁，2トレンチは南壁を基準に示す。

1トレンチ

1層：表土・攪乱。
2層：にぶい黄橙色 10YR6/3 シルト。白色小パミスまじり，堅くしまる。
3層：黄橙色 10YR7/8 シルト。白色小パミスまじり。硬くしまる。上面で畝跡・溝状遺構（SD1）検出。
4ａ層：にぶい黄橙色 10YR6/4 砂質シルト。白色小パミスまじり，マンガン浸透。



4a①：褐灰色 10YR6/1 シルト。パミス少量混じり。
4c①：灰白色 10YR7/1 ベースににぶい黄褐色 10YR5/3 ブロック、灰白色 10YR8/1 細砂混じり。撹拌状態。
Sa①：Sa をブロック状に含むにぶい黄橙色 10YR6/3 シルト。
Sa②：灰黄褐色 10YR6/2 シルト。
a：灰白色 10YR7/1 細砂。
b：褐灰色 10YR5/1 シルト。粗砂混じり。
c：褐灰色 10YR5/1 シルト。礫石礫混じり。
d：灰白色 10YR8/1 細砂、黒色 10YR2/1 シルト、
　パミス混じり。

遺構埋土
SD1：4a①に同じ。
SD2：Sa①に白砂が混じる。
SD3：①褐灰色 10YR6/1 シルト。
　②にぶい黄橙色 10YR6/3 細砂。
　③褐色 10YR4/4 シルト。
　④褐灰色 10YR6/1 シルト質細砂。
　⑤にぶい黄橙色 10YR6/3 粗砂。
P1：黒褐色 7.5YR3/1、にぶい黄橙色 10YR7/3、明黄褐色 10YR7/6 シルトがブロック状に混じる。
　粘性強い。
P2：P1 と同じ
P3：灰黄褐色 10YR6/2 シルトベースに、明黄褐色 10YR7/6 シルトがブロックで混じる。白色小
　パミスわずかに混じる。粘性強い。
P4：にぶい黄橙色 10YR7/2 シルト。粘性強い。鉄分含む。

Fig.11　1 トレンチ（1/80）

4b 層：にぶい黄橙色 10YR7/4 砂質シルト。粗砂混む。白色パミスまじり（軽石水平堆積層があり，川砂も部分的にまじる）。マンガン浸透。中層で小ピット検出。
4c 層：にぶい黄橙色 10YR7/3 砂質シルト。部分的に砂層（川砂）が薄く堆積。
5a 層：にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質シルト。マンガンやや浸透。
5a 層上部には部分的に凹凸がみられ，細砂と 5a 層がブロック状に混ざった層（灰黄褐色 10YR6/2 シルト質砂層）が凹みに部分的に堆積しており（足跡？北壁では 2 枚の堆積層有り），上面で浅い溝状遺構（SD2）検出された。
5b 層：褐色 10YR4/4 シルト。マンガンやや浸透。
5b 層上面も部分的に凹凸がみられ，白色細砂が凹みに堆積する（足跡？）。5b 層下部（5c 層上面）も凹凸がみられ，5b･c 層と白褐色粘質土がブロック状に混ざり凹みに薄く堆積しており，水田層の可能性がある（特にトレンチ北東隅）。
5c 層：暗褐色 10YR3/4 シルト層粘質シルト。上面でピット・溝状遺構（SD3）検出。
5d 層：にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト層粘質シルト。トレンチ東北隅では灰白色 10YR8/2 細砂層になり堆積も厚くなる。
5e 層：黒褐色 10YR2/3 シルト。細砂層が部分的に認められ，下層はわずかにパミス含む。
6a 層：明黄褐色 10YR7/3 細砂。黄・白色パミス混，上面は凹凸が認められる。
6b 層：灰黄色 2.5YR6/2 粗砂。6 層は 1 × 1 m で深掘り，6 b 層を 40cm 掘り下げて終了。

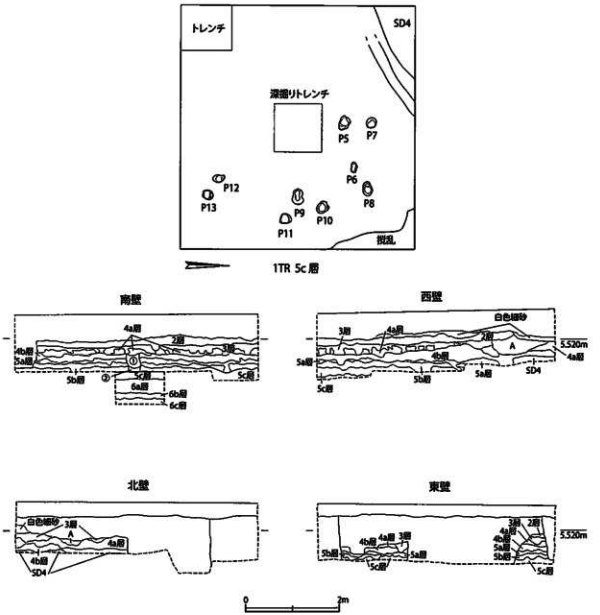
2 トレンチ

1 層：表土・撹乱。
2 層：にぶい黄橙色 10YR6/3 シルト。白色小パミスまじり。堅くしまる。
3 層：明黄褐色 10YR6/8 シルト～細砂。白色小パミスまじり。堅くしまる。
4a 層：にぶい黄褐色 10YR5/3 シルト層粘質シルト。白色パミスまじり（約 15%密度）。堅くしまる。
4b 層：灰黄褐色 10YR5/2 シルト～細砂。白色パミス少量まじり。マンガン浸透。
5a 層：にぶい黄褐色 10YR4/3 シルト。灰白色 10YR7/2 がブロック状にまじる。
5b 層：灰黄褐色 10YR4/2 シルト。にぶい黄橙色 10YR6/3 がブロック状にまじる。上層で溝状遺構（SD4）とピットを検出。
5c 層：黒褐色 10YR2/3 シルト～砂。下部には白色パミス（最大 5cmほど）まじり。
6a 層：明黄褐色 2.5YR6/6 細砂・粗砂（6 a 層より 75cm 深掘り）。
6b 層：灰白色 10YR8/1 粗砂。
6c 層：灰白色 10YR8/1 粗砂。

5　遺構（Fig.11・12）

1 トレンチでは 3 層上面にて北西方向に 5 本の畝跡とそれにほぼ直交する南南西方向の浅い溝を検出した。そして，4 b 層内にて径 5 ～ 10cm で黄褐色シルト質土を埋土とする小ピットを約 30 ヶほど検出した。性格は詳細な検討が必要であるが，稲株痕の可能性がある。小ピット検出面よりややドの 4 b 下層では軽石や粗砂がトレンチの南西 - 北東方向にまとまって検出される面があり，ある時期に一定方向の水流が生じたことが想定される。小ピットの集中地点は軽石の集中する地点と異なっており，該期の水田面地形を示している。

5 a 層上面では，トレンチ南側の東西方向とトレンチ北東隅に細砂と 5 a 層を埋土とする溝状遺構が検出されたが，底面は凹凸が認められ深さは深いところでも約 10cm ほどであった。5 b 層上面では，白細砂が部分的に浅いくぼみに堆積するように認められ，形状は明瞭ではないが足跡痕の可能性がある。また，5 c 層の上面は土層の断面から凹凸がみられることが確認でき，厚さ 1 ～ 2 cm ほどの粘土質の撹拌された層が薄く凹み部に堆積している。5 a･ 5 b・ 5 c 各層の上面の凹凸は，ある時期にその面が水田層として使用・撹拌されていたと考えられる。また，5 c 層上面では 5 基のピットと深さ約 60cm の溝が北北東方向に検出



遺構埋土
ピット①：黒褐色 10YR3/2 シルト。
　　②：灰黄褐色 10YR5/2 シルト。
A：にぶい橙色 5YR6/3 シルト、明褐灰色 7.5YR7/2 シルト混じり。部分的に粗砂混じり。0.5～3cm 大のパミス 20%混じり。
SD4：にぶい黄橙色 10YR7/2 細砂に 4b 層類似ブロック混じり。パミス混じり。
P5：橙色 7.5YR6/6 シルト。極小パミス混じり。
P6：橙色 7.5YR6/6 シルトベースに、茶褐色・灰色シルト小ブロック混じり。
P7：にぶい黄橙色 10YR 7/2 シルト。パミス・鉄分混じり。
P8：上部：褐色 7.5YR4/4 シルト。鉄分浸透、橙色 7.5YR7/3 パミス混じり。粘性強い。
　　下部：にぶい褐色 7.5YR5/3 シルトベースに、上部の土が混じる。
P9：明褐灰色 7.5YR7/2 シルト。鉄分浸透。
P10：P8 上部土層と類似。
P11：褐色 7.5YR4/4 シルト。鉄分の浸透多い。
P12：褐色 7.5YR4/4 シルト。にぶい赤褐色 5YR5/4 シルト混じり。鉄分の浸透多い。
P13：褐色 7.5YR4/4 シルト。明黄褐色 10YR6/8 細砂混じり。

※P6・9 は足跡か？

Fig.12　2 トレンチ（1/80）

されている。

２トレンチは１トレンチに比べ堆積層位も少なく砂層までも浅い。4ａ層上面付近では３層の黄褐色層を埋土とする径約５cm・深さ 10cm ほどの小円形の凹みが認められた。5ａ層上面と５ｂ層上面には凹凸が認められ，凹みに灰白色細砂が堆積しており足跡の可能性も考えられる。5ｂ層上面では２トレンチ北西隅に溝が２条検出された。また，5ｂ層上面より５cm ほど掘り下げたレベルで 10 基のピットが２トレンチ東側に検出された。

6　遺物（Tab.2 ～４，PL.27，Fig.13）

遺物は１トレンチより２トレンチの方が相対的に多く出土しているが，１・２トレンチ合わせて遺物量はコンテナ（60 × 40 × 15cm）１箱の出土量であり，大半が小片であった。

Tab.2　１トレンチ遺物出土状況

道構	層	縄文	成川式 発 口	成川式 発 脚	成川式 発 突帯	成川式 壺 突帯	成川式 高坏 脚	成川式 高坏 脚	成川式 増 口	成川式 突帯	成川式 丹塗	無文土器	土師器	剥片・黒曜石 石材	剥片	礫
	3									1		4				
	4a											1	1			
	4b											1				
	4c							1(丹)			1	36	4			
SB2	埋土					1						2				
	5a					2			1			1		2		
	5b			3	1	1						24			2	
	5c	1										1		1		
	5d										2	44	2			2
	5e											2				1

Fig.13-２・３は，4c 層で出土した土師器坏口縁部であり，内外面に丁寧な横位のナデあるいは回転ナデが施される。２は混和材が目立ち，３は目立たない。

４～９は成川式土器である。4 は坩の口縁部で口径が小さくなる。内外面は丁寧にナデられる。5・6 は壺の突帯部分と考えられる。丁寧なナデが施されるが，6 は外面にハケメが残る。4・5 は 5a 層，6 は 5b 層出土。7 ～９は 5b 層から出土し，7 は東原式の甕の口縁部と考えられる。口唇部を平坦に面取りし，内外面は丁寧な横ナデを施す。指頭痕が消え切っていない。8 は甕の中空脚である。外面は横位の，内面には縦位の工具痕が残る。薄手で接地面に向かって先細りをする特徴などから，中津野式～東原式の甕であると考えられる。9 は幅 2cm ほどの断面台形の突帯で，壺になると考えられる。刻みは工具の小口で，器面に対して斜位に連続して施される。

10 は 5c 層で出土した縄文時代晩期頃の土器の底部と考えられる資料である。やや上げ底状で，外底面にミガキを施し，内底面は立ち上がり部に擦痕がみられる。

２トレンチでは，3 層から薩摩焼が出土する。4ａ層ではあるレベルで土器小破片が集中して出土している。この出土状況から想定すると，南側に隣接する総合研究棟の調査で検出されている，笹貫式の新しい段階に該当する遺物集積遺構の周縁部にあたる可能性がある。

Tab.3　２トレンチ遺物出土状況

層	成川式 発 口	成川式 発 突帯	成川式 発 脚	成川式 壺 口	成川式 壺 脚	成川式 高坏 口	成川式 高坏 脚	成川式 増 底	成川式 壺or増 口	成川式 突帯	成川式 突帯 切目	成川式 突帯 沿線	成川式 突帯 幅広	成川式 丹塗	成川式 沈線 文様	成川式 無文 土器	土師器	薩摩焼	剥片・黒曜石 石材	剥片	礫
3	1													1		23		1	1		
3下～4a上				1						1		1		1							2
4a	3			1	1			1		4	2			5	1	128					5
4b	2	1		1		1			1	2		3	2	11	2	136	2				4
5a			1				1		1	1	1	1		5		54				1	3
5b上																5					1
5b				1							1					6				1	
不明																1					

2トレンチの図化可能な遺物は全て成川式土器である。11は笹貫式甕の口縁部と考えられ，やや内弯する口縁部形状であり，口唇部の余った粘土を外側へ雑に貼りつけている。外面は斜位のヘラナデ調整後，横位のナデを施す。外面に煮沸痕がみられる。内面は斜位のナデが一部にみられる。12は甕の中空脚でしっ

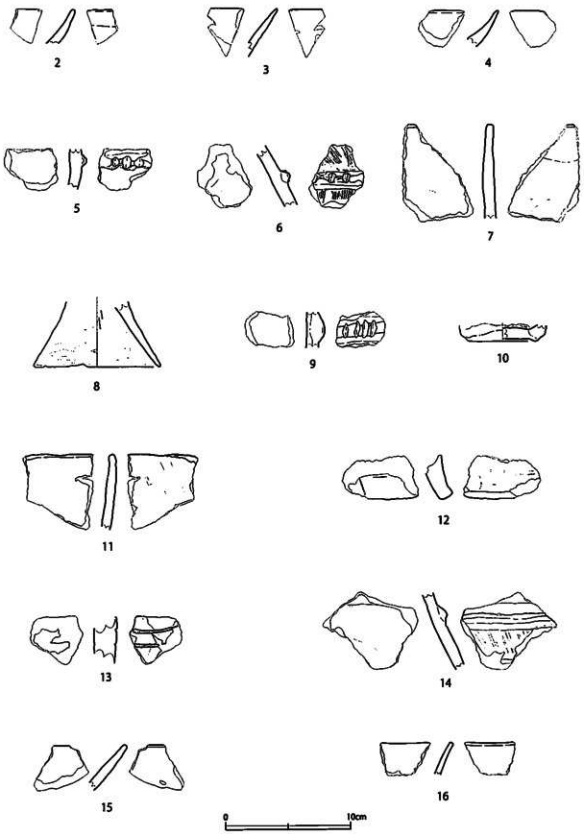
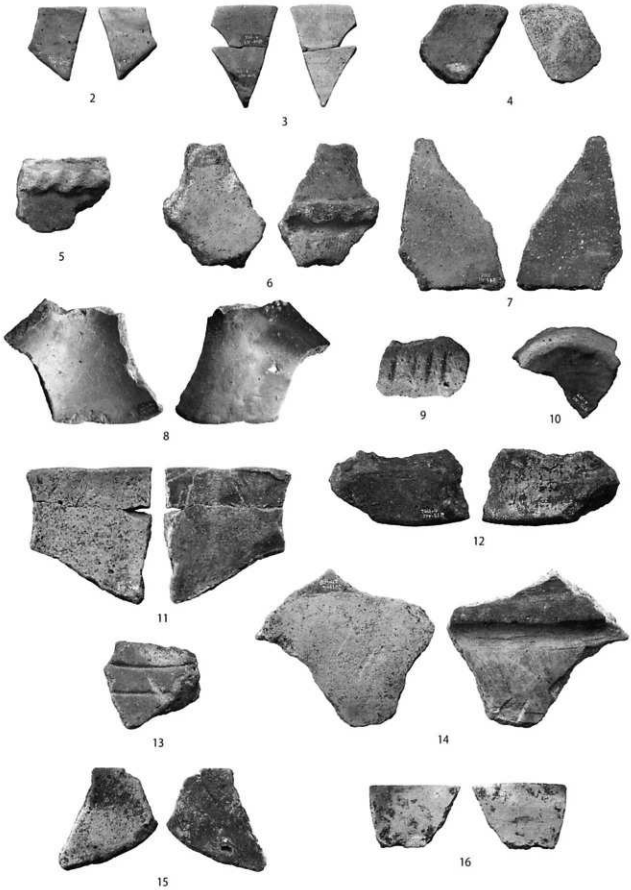


Fig.13　2011-4 出土遺物（1/3）



PL.27　2011-4 出土遺物

かりした厚みをもつ。外面は横位のヘラナデ調整後，横位にナデ消す。13 は大壺の幅広突帯である。破損が著しく，突帯上に施された三条の沈線文のみ確認される。14 は一条突帯の壺と考えられる。胴部に斜位のハケ調整後，突帯を貼り付けている。15 は高坏の口縁部と考えられるもので，外面丹塗りである。11 ～ 15 は 4b 層出土である。

16 は 5a 層出土の土器で，壺か坩の口縁部であり，内外面に横位のナデが施される。

7　まとめ

2 ヶ所の試掘結果からは，古墳時代集落域の拡がりは確認できなかったものの，何度も水田や田畑として利用されてきた生産遺跡地点であると考えられた。ただし，水田層の重なりが複数あり検出が困難な場合があること，また近接するトレンチではあったが層の堆積状況や深度は大きく異なっている点などは本調査の際は注意が必要である。

また，本試掘地点の西側にあたる地点も新営校舎建設予定地となっており，旧河道跡が残存している可能性が高い。工事の際には慎重な対応が必要である。

Tab.4　2011-2・2011-4 遺物観察

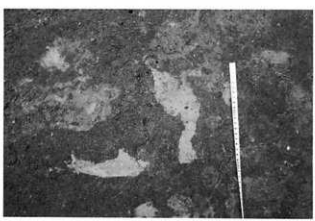
No.	コード名	地点	層位	時期	器種・型式	器種	部位	調整 外	調整 内	色調	備考
1	2011-2	試掘d	3	弥生	上器	壺	突帯	横ミガキ	縦ミガキ	外：黒褐10YR3/1,内：にぶい黄橙10YR6/4	器面のまみ？
2	2011-4	1TR	4c	古代	土師器	坏？	口	横ナデ,指頭痕	横ナデ	外：褐7.5YR7/6, 内：褐5YR7/6	
3	2011-4	1TR	4c	古代	土師器	坏？	口	回転ナデ	回転ナデ	外：橙2.5YR7/6, 内：褐2.5YR6/6に加彩	
4	2011-4	1TR	5a	古墳	成川式	坩	口	ナデ	ナデ	内外：にぶい褐7.5YR7/4	
5	2011-4	1TR	5a	古墳	成川式	壺	突帯	ナデ	ナデ	外：浅黄橙10YR8/3・灰黄褐10YR6/2, 内：浅黄橙10YR8/4	
6	2011-4	1TR	5b	古墳	成川式	壺	突帯	上：斜ハケ，下：縦ハケ	ナデ	外：橙5YR6/6に加彩・にぶい褐7.5YR7/3, 内：灰白10YR8/2	
7	2011-4	1TR	5b	古墳	成川式(東原式)	甕	口	横ナデ	横ナデ	外：褐7.5YR4/3, 内：にぶい赤褐5YR5/4, 内：灰黄褐10YR6/2・にぶい黄橙10YR6/3	
8	2011-4	1TR	5b	古墳	成川式(中津野式～東原式)	甕	脚	横ヘラナデ	上：横ヘラナデ，中：縦ヘラナデ，下：横ヘラナデ	内外：褐7.5YR7/6・浅黄橙10YR8/3	中空脚，外：黒斑
9	2011-4	1TR	5b	古墳	成川式	壺	突帯	ナデ	ナデ	外：にぶい褐7.5YR7/4・にぶい黄橙10YR7/3, 内：にぶい褐7.5YR7/4	突帯幅2cm
10	2011-4	1TR	5c	縄文	晩期？	鉢？	底	ミガキ	横ヘラナデ	外：暗灰N3/・灰黄2.5Y6/2, 内：にぶい褐7.5YR6/4	上げ底，底径(5cm)
11	2011-4	2TR	4b	古墳	成川式(浜貝式)	甕	口	斜ヘラナデ・横ナデ	斜位ナデ(一部)	外：にぶい黄橙10YR6/3, 内：褐灰10YR6/1, 内：にぶい黄橙10YR7/4に加彩	外：煤付着
12	2011-4	2TR	4b	古墳	成川式	甕	脚	横ヘラナデ・横ナデ	ナデ	外：灰黄褐10YR6/2, 内：褐7.5YR4/3	中空脚
13	2011-4	2TR	4b	古墳	成川式	大壺	幅広突帯	ナデ	ナデ？	外：にぶい褐7.5YR5/4, 内：にぶい赤褐5YR4/4	三条沈線文？
14	2011-4	2TR	4b	古墳	成川式	壺	突帯	斜ハケ	ナデ	外：にぶい黄橙10YR7/3・灰黄褐10YR4/2, 内：にぶい黄橙10YR7/4	
15	2011-4	2TR	4b	古墳	成川式	高坏	口	ミガキ？	ナデ	内：にぶい赤褐2.5YR4/3, 外：浅黄橙10YR8/4, 内：淡黄2.5Y8/3	外面：丹塗り・イキ圧痕
16	2011-4	2TR	5a	古墳	成川式	壺か坩	口	横ナデ	横ナデ	外：褐N3/6・にぶい黄橙10YR7/2, 内：にぶい黄橙10YR7/4	内外：黒斑

PL.28　1トレンチ東壁

PL.29　1トレンチ3層上面畝・SD1検出（東より）

PL.30　1トレンチ5a層上面SD2検出（西より）

PL.31　1トレンチ5a・5b層堆積状況



PL.32　1トレンチ5a層上面足跡？検出

PL.33　1トレンチ 5c 層上面 SD3 完掘（北より）

PL.34　1トレンチ北壁土層

PL.35　2トレンチ南壁

PL.36　2トレンチ 5b 層上面 SD4・5c 層上面

PL.37　2トレンチ深掘りトレンチ

Ⅳ　立会調査（2011-A ～ L）

平成 23（2011）年度は，郡元団地内で 5 件，桜ケ丘団地内で 5 件，計 10 件の立会調査を実施した。国立大学法人化以後，調査は鹿児島市教育委員会が担当することになっており，埋蔵文化財調査センターがオブザーバーとして立会う。ガス漏れや漏水などの緊急時や，双方の日程の都合のつかない場合は，埋蔵文化財調査センター単独で調査を行なっている。以下にその概要を記す。なお，遺物に関しての詳細は，Tab.7 の観察表を参照されたい。

2011-A　附属中学校グランド改修その他工事 (Fig.2・14 ～ 16，Tab.5・7)

調査地点　郡元団地 R ～ T-5 ～ 9 区
調査期間　2011 年 4 月 22 日，5 月 16・19・20 日，6 月 3・13 日，7 月 6 日
調査担当　鹿児島市教育委員会　野邉盛雅・末吉広海
　　埋蔵文化財調査室　寒川朋枝・新里貴之

Fig.14　2011-A 調査地点（1/2000）

教育学部附属中学校において，グランドの排水機能を高めるため，排水配管工事を主体とした掘削が行なわれたが（2011-1 附属中学校改修工事その他工事に伴う発掘調査），附属小学校においてもそれに付随した工事が行われた。その掘削ルートに沿って，22 か所で調査を行なった。

A 路線では，既設トラフ撤去後，1 ～ 3 地点を地表下 100 ～ 120cm まで掘削したが，遺物包含層は検出されなかった。ただし，1 地点の掘削部底面（地表下 110cm）で地山と包含層と思われる黒色土が一部で確認された。

B 路線 a 地点は掘削深度 160cm，c 地点は 120cm，d 地点は 45cm まで撹乱されていた。b 地点は掘削深度 135cm であったが，地表下 45cm から良好な状態の古墳時代の包含層（2 層）が確認され，その下部で 6 点の遺物が出土した。

そのうちの 1 点は古墳時代前期の東原式土器の甕口縁部であり，肩部に一条の横位突帯を巡らす。内外面ともに横位のナデを施すが，内面はその前にヘラナデされている。焼成は良好である（Fig.16）。その路線を新たに掘削深度 120cm で 3 カ所（A

Tab.5　2011-A 遺物出土状況

地点		層	成川式						
			甕	壺	突帯			丹塗	無文土器
			口	口	突帯	刻目			
B路線	A地点								3
	B地点				1	1			2
	C地点		1					1	12
	D地点			1					5
	E地点								5
	b地点	2下	3						3
	c地点	1							2
C路線	b地点	水田層							2

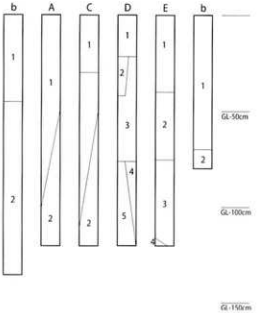


Fig.15　2011-A 柱状図

～ C 地点）確認したが，A・B 地点で時期不明の土層が確認された。B 地点は掘削部底面の一部に遺物包含層が確認された。これらの地点では無文胴部小片を中心に，古墳時代の土器片が数点出土している。D・E 地点も 120cm 深度で掘削したが，地表下 40cm で古墳時代の遺物包含層が確認された。土器も無文胴部小破片を中心に 11 点出土した（Tab.5）。

C 路線では，a 地点を 110cm，b 地点を 80cm，c・d 地点を 85cm 深度まで掘削した。b 地点以外は撹乱されており，b 地点において地表下 70cm から水田層が確認された。無文胴部小破片が 2 点出土している。

D 路線では，a 地点を 80cm，b ～ d 地点を 85cm 深度まで掘削したが，全て撹乱されていた。

E 路線は擁壁つけかえ工事に伴う調査であったが，全て撹乱されていた。

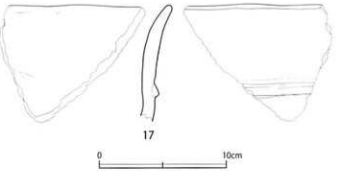


Fig.16　2011-A 遺物（1/3）

PL.38　2011-A 遺物

2011-C　医科外来棟前外来患者用駐車場工事・外灯設置 (Fig.3)

調査地点　桜ケ丘団地 E ～ F-3 ～ 5 区

調査期間　2011 年 4 月 20 日

調査担当　鹿児島市教育委員会　上村俊洋

埋蔵文化財調査室　寒川朋枝

医学・歯学部附属病院外来棟前の駐車場に外灯を設置する工事が行われた。該当箇所は 4 カ所で，掘削深度 130cm まで掘削したが，全て撹乱されていた。遺物も得られていない。

2011-D　駐車場整備工事・外灯設置 (Fig.3・17)

調査地点　桜ケ丘団地 C-4・5 区

調査期間　2011 年 5 月 20 日

調査担当　鹿児島市教育委員会　野邉盛雅

　　埋蔵文化財調査室　中村直子

医学・歯学部附属病院駐車場において，外灯を設置する工事が行われた。掘削ルートに沿って，8 か所で調査を行なった。

A1・2 地点は，掘削深度 60cm であったが，地表下 25cm ドよりアカホヤ火山灰，縄文時代早期層などが確認された。風倒木のための層位横転が各所で確認される。A2 地点は東側に傾斜する旧地形のため，アカホヤ火山灰が厚く堆積している。

B 地点は，掘削深度 80cm であるが，地表下 20cm より包含層等が検出された。C・D 地点もほぼ同様である。

E 地点は，E3 地点は，掘削深度 130cm であり，地表下 20cm よりサツマ火山灰層，100cm 下位よりチョコ層が確認された。

各箇所ともに遺物は得られなかった。

B1
1：表土・撹乱層．
2：アカホヤ火山灰層．
3：灰褐色砂質シルト層（縄文早期層とサツマ火山灰のまじり土）．
4：サツマ火山灰層．

E3
1：表土・撹乱層．
2：サツマ火山灰層．
3：チョコ層．

Fig.17　2011-D 柱状図

2011-F　総合研究博物館常設展示室散水栓設置工事 (Fig.2)

調査地点　都元団地 F-4 区

調査期間　2011 年 7 月 11 日

調査担当　鹿児島市教育委員会　末吉広海

埋蔵文化財調査室　寒川朋枝

総合研究博物館常設展示室近隣で，散水栓を埋設する作業を行なった。地表下 35 ～ 50cm の浅い掘削工事であり，全て撹乱されていた。遺物も得られていない。

2011-G　基幹整備（エネルギー管理設備等）工事 (Fig.3)

調査地点　桜ケ丘団地 E ～ 0-4 ～ 10 区

調査期間　2011 年 9 月 6 日

調査担当　鹿児島市教育委員会　野邉盛雅

　　埋蔵文化財調査室　寒川朋枝

基幹整備にかかわる掘削工事が行なわれた。①・②地点ともに地表下 80 ～ 85cm まで掘削したが，全て撹乱層であった。遺物も得られていない。

2011-H　基幹整備（エネルギー管理設備等）工事 (Fig.2・18・19，PL.39，Tab.6・7)

調査地点　都元団地 B ～ T-3 ～ 13 区

調査期間　2011 年 8 月 30 日，9 月 6 ～ 8・14・27・29 日，10 月 3・5・6・8・15・25 日

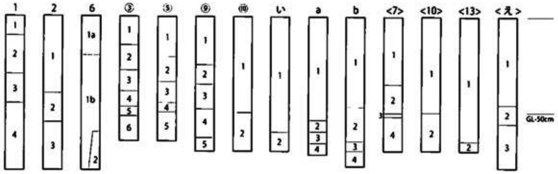
調査担当　鹿児島市教育委員会　末吉広海

埋蔵文化財調査室　寒川朋枝・中村直子

基幹整備工事に伴い，都元キャンパスのほぼ全域にわたって掘削工事が行なわれた。

農学部実習地周辺では，1・2 地点で 80cm の深度，3 ～ 7・9 ～ 11 地点において 70cm の深度まで掘削した。その結果，1・2 地点において水田層の堆積，6 地点で一部水田層が確認された。残りの地点は全て撹乱されていた。

教育学部周辺では，①・②・④・⑩地点は掘削深度 70cm まで全て撹乱されていた。③・⑤地点では地表ド 15 ～ 22cm が撹乱されているものの，その下位は水田層が確認された。遺物は得られていない。⑨地点は水田層下位に遺物包含層らしきシルト層が確認されたが，遺物は無文胴部 1 点と石材のみの出土である。



1
1：表土・撹乱層。
2：灰黄褐色 10YR5/2 シルト。鉄分をまばらに含む。
3：明黄褐色 10YR6/6 シルト。鉄分を含む（多）。
4：灰黄褐色 10YR6/2 シルト。鉄分を含む。パミス（少）まじり。

2
1：褐灰色 5YR4/1 シルト層。鉄分を含む（少）。
2：にぶい赤褐色 5YR4/4 シルト層。筋状に鉄分を含む（多）。
3：灰黄褐色 10YR6/2 シルト層。鉄分を含む（少）。

6
1a：表土・撹乱層。
1b：オリーブ黒 5Y3/1 シルト層。
2：明黄褐色 10YR6/6 シルト層。鉄分を含む。

③
1：表土・撹乱層。
2：灰黄褐色 10YR5/2 シルト層。
3：にぶい黄橙色 10YR6/4 シルト層。鉄分を含む（多）。
4：明黄褐色 10YR6/6 シルト層。
5：褐色 10YR4/6 シルト層。鉄分を含む。
6：明黄褐色 10YR6/8 砂層。

⑤
1：表土・撹乱層。
2：灰黄褐色 10YR6/2 シルト層。白色小礫を含む。
3：にぶい黄橙色 10YR5/4 シルト層。鉄分を含む。白色小礫を含む。
4：黄橙色 10YR7/8 砂層。
5：褐色 10YR4/6 シルト層。鉄分を含む。
6：黒褐色 10YR2/2 シルト層。

⑨
1：表土・撹乱層。
2：明褐灰色 7.5YR7/2 シルト層。
3：橙色 7.5YR6/6 シルト層。鉄分・砂・白色礫まじり。
4：褐灰色 10YR5/1 シルト層。鉄分を含む。
5：黒褐色 10YR2/2 シルト層。土器片 1 点出土。

⑩
1：表土・撹乱層。
2：明褐灰色 10YR7/2 シルト層。

い
1：表土・撹乱層。
2：灰褐色 7.5YR5/2 シルト層。パミスまじり。

a
1：表土・撹乱層。
2：橙色 7.5YR6/6 シルト層。
3：橙色 7.5YR6/8 シルト層。
4：褐色 7.5YR4/4 シルト層。

b
1：表土・撹乱層。
2：褐灰色 7.5YR6/1 シルト。パミスまじり（少）。
3：橙色 7.5YR6/8 シルト層。砂まじり。
4：褐色 7.5YR4/4 シルト層。
5：黒褐色 7.5YR3/2 シルト層。上面に固着した鉄分がまばらに分布。

<7>
1：表土・撹乱層。
2：黄褐色 10YR7/8 シルト層。パミスまじり（少）。
3：にぶい黄橙色 10YR5/3 シルト層。
4：褐灰色 10YR6/1 シルト層。鉄分を含む。

<10>
1：表土・撹乱層。
2：褐灰色 10YR6/1 シルト層。鉄分を含む。

<13>
1：表土・撹乱層。
2：川砂。

え
1：表土・撹乱層。
2：明黄褐色 2.5YR6/8-7/4，にぶい黄橙色 10YR7/3 砂層。土器小片含む。
3：にぶい赤褐色 5YR5/3，灰黄褐色 10YR6/2 細砂層。上部より土器多量出土

Fig.18　2011-H 柱状図

⑩地点は掘削深度 50cm 下位に水田層らしきシルト層が確認された。⑥・⑧地点は掘削深度 70cm まで撹乱されていた。あ地点では，地表下 70cm まで撹乱されていた。い地点では，掘削深度 69cm まで撹乱されていたが，底面に水田層らしきシルト層が確認された。郡元南食堂東ルートでは，ほとんどが既設配管によって撹乱されていたものの，一部にプライマリーな層が残存していた（a・b 地点）。その地点においても地表下 47 ～ 60cm が撹乱されている。

郡元北 1 地区では，＜ 1 ＞～＜ 13 ＞地点を地表下 70cm まで掘削したが，ほとんどが撹乱されていた。＜ 7 ＞地点では地表下 35cm まで，＜ 10 ＞地点では地表下 50cm まで撹乱されていたものの，それより下位には水田層が残存していた。＜ 13 ＞地点では地表下 65cm ま

Tab.6　2011-H 遺物出土状況

地点	層	成川式 甕 口	甕 脚	壺 口	壺 突帯	壺 刻目	高坏 脚	高坏 胴	突帯 絡縄	無文土器	台石	石材	石
a・b地点										1		1	
え地点	2								1	4			
	3	7	4	1	2	1	1	1		51	1		1

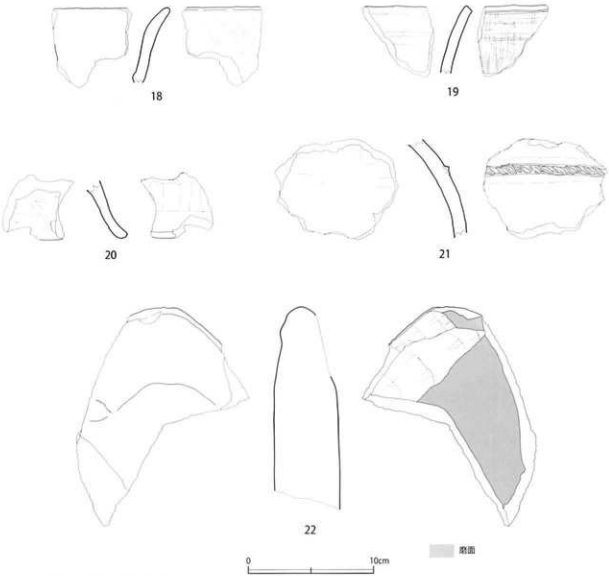


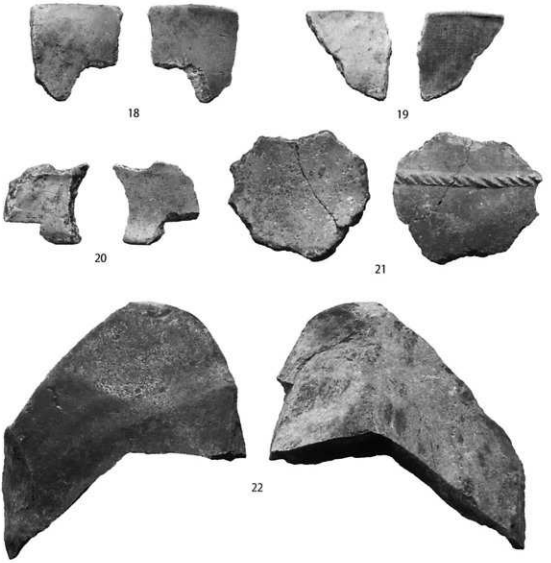
Fig.19　2011-H 出土遺物（1/3）

で攪乱されていたが，それよりも下位に均一な砂層が確認され，川砂ではないかと考えられた。各地点ともに遺物は出土していない。え地点では，80cm 深度まで掘削したが，地表下 46cm まで攪乱されていた。それより下位には粗砂・細砂からなる砂層が堆積しており，2・3 層より比較的多数の土器片が得られた（Tab.7）。

図化した土器は，全て成川式土器である（Fig.19-18 ～ 21）。18 は古墳時代前期に該当する東原式甕の口縁部であり，口縁端部が丸みを帯び，口の開く外反口縁である。外面は斜位のハケ調整の後，丁寧に横ナデによりハケメを消している。19 も東原式甕の口縁部であるが，整調なつくりで，口縁端部はハケにより面

Tab.7　立会調査出土遺物観察

No.	コード名	地点	層位	時期	型式	器種	部位	調整 外	調整 内	色調	備考
17	2011-A	旧路柳b	2下	古墳	成川式(東原式)	甕	口	横ナデ	横ヘラナデ→横ナデ	外:にぶい赤褐5YR5/4,内:にぶい褐7.5YR5/4,口縁部	一条突帯
18	2011-H	え	3	古墳	成川式(東原式)	甕	口	斜ハケ→横ナデ	横ナデ	外:灰黄褐10YR4/2,内:橙7.5YR6/6	
19	2011-H	え	3	古墳	成川式(東原式)	甕	口	縦ハケ→横ハケ	斜ヘラナデ→横ナデ	外:にぶい褐7.5YR5/4,内:にぶい橙7.5YR6/4	外:煤付着
20	2011-H	え	3	古墳	成川式	甕	脚	上:縦ヘラナデ,下:横ナデ	上:縦ヘラナデ,下:横ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4,口縁部,内:にぶい橙7.5YR6/4,口縁部	中空脚
21	2011-H	え	3	古墳	成川式	壺	突帯	横ナデ	横ナデ	外:にぶい黄橙10YR5/3,内:にぶい橙7.5YR6/4	一条刻目突帯(刻み内に布目圧痕)



PL.39　2011-H 出土遺物

取りし，方形状を呈する外反口縁である。外面は縦位のハケ調整後，横位のハケ調整を施す。内面は斜位のヘラナデ後，横ナデしている。20 は甕の中空脚部で，接地面にむかってやや開く。内外面ともに縦位のヘラナデ調整後，端部を横ナデしている。21 は壺の突帯部である。一条の斜位の刻目を連続させるが，刻目内に布目圧痕が残される。

22 は台石が破損したものとみられる。表面と上部に使用による磨面が確認できる。裏面は光沢が生じ，土壌の鉄分が一面に付着しているが使用されていない。硬質砂岩製。

2011-I　海洋土木工学科棟等便所改修工事 (Fig.2)

調査地点　郡元団地 J・K-11・12 区

調査期間　2011 年 12 月 5 日

調査担当　鹿児島市教育委員会　上村俊洋

埋蔵文化財調査室　寒川朋枝

海洋土木工学科棟に隣接して，既掘管部の横に配管を新設する工事が行なわれた。地表下 45 ～ 50cm まで掘削したが，配管新設予定部も撹乱されていた。遺物も得られていない。

2011-J　基幹整備（木質バイオマスボイラ設備）工事 (Fig.3・20)

調査地点　桜ケ丘団地 F-10 区

調査期間　2011 年 11 月 14・15 日

調査担当　埋蔵文化財調査室　新里貴之

基盤設備工事に関連して，バイオマスボイラに入室する共同溝設置箇所の掘削工事が行なわれた。同箇所は 2011-3 基幹設備工事に伴う発掘調査 C 地点に東接する。A 地点は掘削深度 170cm，B 地点は掘削深度 190cm であるが，地表下 160cm まで撹乱されていた。A 地点では 2 層にアカホヤ火山灰，B 地点では 2 層にクロボク土が確認され，西から東へ傾斜する旧地形であると判断された。C 地点は既存のバイオマスボイラ除去後の壁面を精査し，225cm の深度まで土層が確認できた。同地点では地表下 70cm で旧耕作土が確認され，165cm で削平されたアカホヤ火山灰が確認されている。遺物は得られていない。

2011-K　難治ウイルス病態制御研究センター非常電源幹線工事 (Fig.3・20)

調査地点　桜ケ丘団地 I-8 区

調査期間　2012 年 1 月 26 日

調査担当　鹿児島市教育委員会　末吉広海

埋蔵文化財調査室　中村直子

難治ウイルス病態制御研究センターにおいて，低圧電力管路の埋設工事が行なわれた。配管ルートで 2 か所の確認を行なったが，地表下 30 ～ 45cm まで撹乱されていた。それより下位はアカホヤ火山灰であり，一部，風倒木による層位横転が確認できた。遺物は得られていない。

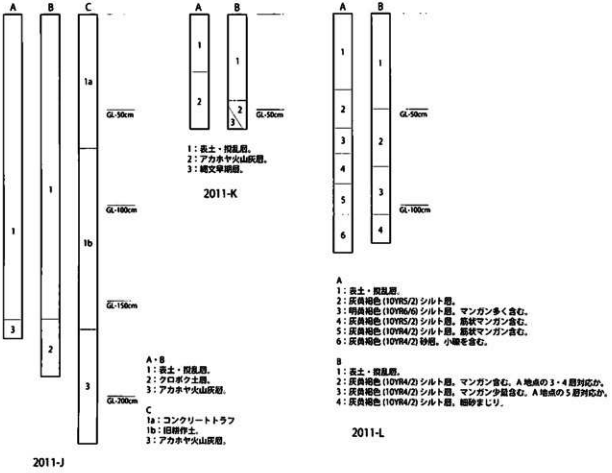


Fig.20　2011-J・K・L 柱状図

2011-L　稲盛会館外壁改修工事 (Fig.2・20)

調査地点　郡元団地 L-12 区

調査期間　2012 年 2 月 1 日

調査担当　鹿児島市教育委員会　末吉広海

埋蔵文化財調査室　寒川朋枝

稲盛会館外壁改修工事に伴う側溝付け替え工事が行なわれた。外部への出入り口予定箇所を挟んで A・B 地点とし，土層確認を行なった。A 地点では掘削深度 125cm，B 地点では掘削深度 120cm をはかり，両地点ともに地表下 40 ～ 50cm まで攪乱されていた。その下位に水田層らしき土層が確認されたものの，遺物は出土せず，時期については不明であった。

まとめ

平成 23（2011）年度立会調査は，鹿児島大学構内遺跡郡元団地がメインとなり，ほぼキャンパス全域で調査が行われた。安定して遺物が得られたのは，附属小学校地点（2011-A・B 路線），工学部建築学科地点（え地点）である。遺物は古墳時代前期の東原式土器や台石などが得られている。その他の地点は，土層は良好に残っている箇所は多いものの，遺物が得られていない。脇田亀ヶ原遺跡桜ケ丘団地においても，良好な土層の確認はできたが，遺物などは得られなかった。

郡元団地教育学部敷地内は，附属中学校を中心として古墳時代の集落跡と推定されているが，附属小学校地点（2011-A・B 路線）周囲にもその範囲が及ぶ可能性がある。渡り廊下部分であるため，工事による掘削が及ばなかったものであろう。今後の工事では慎重な対応が必要である。工学部建築学科は，弥生時代～古墳時代の河川跡付近に位置し，その周辺には同時期の水田層も想定されている箇所である。引き続き慎重な調査を行なっていきたい。

PL.40　2011-A　B 路線 b 地点（南より）

PL.41　2011 － A　B 路線 b 地点南壁

PL.42　2011-A　C 路線 b・c 地点付近

PL.43　2011-A　C 路線 b 地点東壁

PL.44　2011-D　B 地点（北西より）

PL.45　2011-D　B1 地点北壁

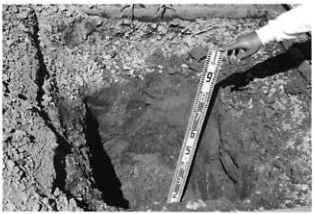
PL.46　2011-D　E3 地点（北より）

PL.47　2011-D　E3 地点西壁

PL.48　2011-H　1 地点

PL.49　2011-H　1 地点土層

PL.50　2011-H　2 地点



PL.51　2011-H　2 地点土層

PL.52　2011-H　6・7地点付近

PL.53　2011-H　6地点土層

PL.54　2011-H ③地点

PL.55　2011-H ③地点土層

PL.56　2011-H ⑤地点

PL.57　2011-H ⑤地点土層

PL.58　2011-H ⑨地点土層

PL.59　2011-H ⑨地点土層

PL.60　2011-H ⑩地点土層

PL.61　2011-H ⑩地点土層

PL.62　2011-H い地点土層

PL.63　2011-H い地点土層

PL.64　2011-H　a・b 地点付近

PL.65　2011-H　a 地点土層

PL.66　2011-H　b 地点土層

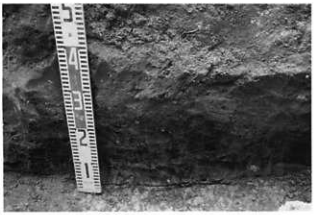
PL.67　2011-H＜7＞地点

PL.68　2011-H＜7＞地点土層

PL.69　2011-H＜10＞地点

PL.70　2011-H＜10＞地点土層

PL.71　2011-H え地点



PL.72　2011-H え地点土層

PL.73　2011-H え地点 3 層土器出土状況

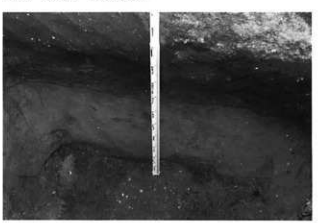
PL.74　2011-J 調査地点（西より）

PL.75　2011-J　A 地点北壁

PL.76　2011-J　C 地点（南より）

PL.77　2011-J　B 地点南壁

PL.79　2011-J　C 地点南側北壁（工事中確認）



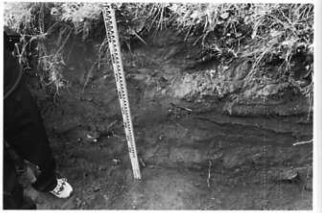
PL78　2011-J　C 地点北壁

PL.80　2011-K（東より）

PL.81　2011-K　A 地点北壁

PL.82　2011-K　B 地点北壁

PL.83　2011-L　A 地点（東より）



PL.84　2011-L　A 地点西壁

PL.85　2011-L　B 地点（北より）

PL.86　2011-L　B 地点西壁

Ⅴ 整理

平成22（2010）年度の報告書第7集の掲載予定である，平成20・21（2008・2009）年度桜ケ丘団地中央機械棟工事・新病棟建設工事に伴う発掘調査（2008-1・2009-4）遺物の実測・トレース，同年刊行予定の年報26掲載予定であった平成22（2010）年度の試掘調査遺物（2010-2・3）・立会調査遺物（2010-A～I）の洗浄・注記・実測・トレースを行なった。

また，昭和51（1976）年度理学部2号館増築予定地（釘田第8地点）発掘調査（1976-1）遺物の洗浄・注記を行なった。

Ⅵ 刊行

平成20年度発掘調査報告（2008-1）を掲載した「鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書　第7集」ならびに平成22年度発掘調査概要報告（2010-1），試掘調査報告（2010-2・3），立会調査報告（2010-A～I）その他事業を掲載した「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報26」を刊行した。

PL.87　調査報告書第7集

PL.88　年報26

Ⅶ 保管

毎年実施している遺物保管作業として，平成23（2011）年5・6月に遺物収蔵状況確認を10か所（総合研究博物館は除く）で行なった。また，工・実験工場，理工・廃液処理室に保管してある木製品保管水槽の水替えを平成24（2012）年3月26～29日の期間で行なった。

膨大な理学部2号館増築予定地（釘田第8地点）の遺物資料は，理工系総合研究棟地下1階で分類・注記作業を行なっていた。しかしながら地下には埃がかなり堆積しており，照明は暗く，作業だけでなく作業者の健康も害する可能性のあることから，平成23（2011）年6月3～7日にかけて地下室の水洗洗浄作業を行なった。その後も整理作業を継続していたものの，梅雨時期に多量の水滴が遺物コンテナに溜まることが分かり，遺物そのものや遺物緩衝材にカビが発生している事態，水槽に蚊が発生していることなどを受け，作業や遺物保管に不適切である現状を埋蔵文化財調査委員会から本学施設部に訴え，理工学部との協議を行ない，理工系総合研究棟5階の研究室を借り受けることができ（3年間），平成23（2011）年12月8日，遺物の移転作業を行なった。

また，整理作業室として借り受けていた農学部共同利用棟の部屋が，旧サークル棟建直し工事のため，各

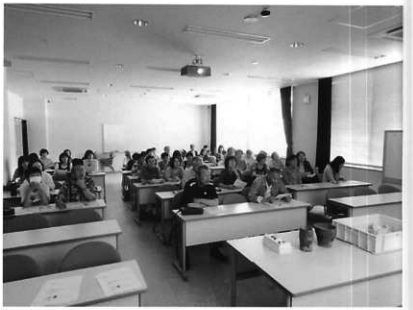
サークルが使用することとなり，同棟１階の別部屋に移転することとなった。移転作業は平成 24（2012）年２月 27 日に行われた。

Ⅷ　その他の事業

１　公開講座

平成 23（2011）年７月 23 日，総合教育研究棟において『原始古代のものづくり』というテーマで，「石器の作り方（寒川）」，「ヤコウガイの蓋を用いた製品について（新里）」，「土器の作り方（中村）」を講演した。39 名の参加者があった。

PL.89　公開講座ポスター



PL.90　公開講座様子

２　遺跡・遺物見学，整理作業体験

2011-1 郡元団地 R ～ T-7 ～ 9（附属中学校改修工事その他工事）に伴う発掘調査の１期工終了後の平成 23（2011）年７月 21 日，附属中学校２年次の生徒３名が夏休みの自由研究の題材として，附属中学校出土遺物を見学した。

2011-3 桜ケ丘団地 D・E-7・8（基幹整備工事）に伴う発掘調査が行われていた折，平成 23（2011）年

PL.91　附属中学校生徒

PL.92　桜ケ丘東小学校生徒

12月26日，2011年12月13日付『南日本新聞』記事（5　他機関による鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）・脇田亀ヶ原遺跡（桜ケ丘団地）の紹介参照）を読んだ桜ケ丘東小学校の生徒2名が発掘現場を訪れた。遺跡の現状説明とともに遺物洗浄の体験作業を行なった。

3　調査室のアウトリーチ活動報告

鹿児島大学生涯学習教育研究センターの依頼により，「埋蔵文化財調査室における普及・啓発活動」において，埋蔵文化財調査室設置以後，昭和62（1987）年より行なってきたアウトリーチ活動の歩みを紹介した。

PL.93　アウトリーチ活動報告

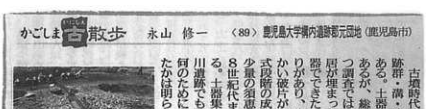
4　遺物資料貸出

鹿児島大学総合研究博物館の依頼により，脇田亀ヶ原遺跡（桜ケ丘団地E～G-8～10区：中央診療棟新営その他工事；未報告）で出土した縄文時代草創期の石器類25点を貸し出した。現在同博物館の常設展示室でミニ展示されている。

5　新聞による鹿児島大学構内遺跡郡元団地・脇田亀ヶ原遺跡桜ケ丘団地

平成23（2011）年4月1日，『南日本新聞』に連載されていた「かごしま古（いにしえ）散歩89」（永山修一氏）によって鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）の紹介がなされた。

平成23（2011）年12月13日，『南日本新聞』に各地域の情報を紹介するコーナーで「＜桜ケ丘新聞＞縄文時代も宅地」とした記事が掲載された。



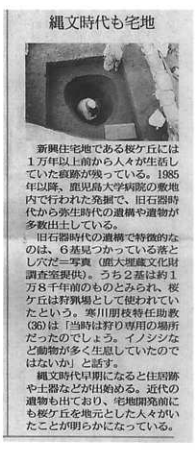
かごしま古散歩　永山　修一　〈89〉鹿児島大学構内遺跡郡元団地（鹿児島市）

古墳時代の遺構として、住居跡群・溝・遺物集積遺構などがある。土器集中廃棄所は2カ所つ調査では、総合研究棟建設に先立つ調査では、6世紀代の竪穴住居が埋まった後、廃棄された土器でできた直径5㍍の盛り上がりがあり、直径20㍍の範囲に細かい破片があった。主体は作貫式段階の成川式土器であるが、少量の須恵器もかじっており、8世紀代まで降る可能性もある。土器集中廃棄所は、機能、何のために多量の土器を廃棄したかは明らかになっていない。

土器の集中廃棄所（鹿児島大学埋蔵文化財調査室提供）

2011.4.1

PL.94　南日本新聞 2011.4.1 より転載



縄文時代も宅地

新興住宅地である桜ケ丘には1万年以上前から人々が生活していた痕跡が残っている。1985年以降、鹿児島大学病院の敷地内で行われた発掘で、旧石器時代から弥生時代の遺構や遺物が多数出土している。

旧石器時代の遺構で特徴的なのは、6基見つかっている落とし穴だ＝写真（鹿大埋蔵文化財調査室提供）。うち2基は約1万8千年前のものとみられ、桜ケ丘は狩猟場として使われていたという。寒川朋枝特任助教（36）は「当時は狩り専用の場所だったのでしょう。イノシシなど動物が多く生息していたのではないか」と話す。

縄文時代早期になると住居跡や土器などが出始める。近代の遺物も出ており、宅地開発前にも桜ケ丘を地元とした人々がいたことが明らかになっている。

PL.95　南日本新聞 2011.12.13 より転載

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター年報 27

2013年 3 月発行

編集・発行　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

鹿児島市郡元一丁目 21-24

TEL 099-285-7270

印刷　斯文堂株式会社

鹿児島市南栄2-12-6

TEL 099-268-8211

Kagoshima University
Research Center for Archaeology
Report Vol.27

CONTENS

Chapter
1 Report of archaeological research in fiscal year 2011 ····· 4
2 Outline of excavation at Area R～T·7～9 in Korimoto Campus (2011-1) ····· 8
3 Outline of excavation at Area D·E·7·8 in Sakuragaoka Campus (2011-3) ····14
4 Report of text excavation at Area D·E·7·8 in Sakuragaoka Campus(2011-2)··19
5 Report of text excavation at Area H·I·3·4 in Korimoto Campus (2011-4) ·····23
6 Report of rescue surveys 2011 (2011-A～L) ·····34
7 Report of other jobs ·····48

Published by
Kagoshima University Research Center for Archaeology
2013